

Archaeological Research
at
the HOTAKA TUMULI

長野県安曇野市

穂高古墳群

2011年度 発掘調査報告書



July , 2012



Department of Archaeology,
Faculty of Letters,
Kokugakuin University

4-10-28 Higashi, Shibuya-ku, Tokyo, JAPAN 150-8440

穂高古墳群

2011年度発掘調査報告書

國學院大學文学部考古学実習報告



2012.7

國學院大學文学部考古学研究室

長野県安曇野市

穂高古墳群

THE HOTAKA TUMULI

2011年度 発掘調査報告書

2012. 7

國學院大學文学部考古学研究室

緒 言

安曇野の古墳文化をさらに詳しく知るために、2009年度に穂高古墳群の調査を始めて3年が経過した。初年度はF9号墳とF10号墳の墳丘測量と現状の確認を行い、後世の破壊と攪乱を受けてはいたが、現状でF9号墳が直径約17m、高さ約1.3m、F10号墳が直径約13m、高さ約1.8mの墳丘を持つこと、両古墳とも南に入り口を持つ横穴式石室であったことを確認することができた。

二年目の2010年度には比較的保存状態の良いF10号墳は発掘せず、現状のまま後世に残すこととし、比較的保存状態の良いF9号墳を発掘の対象に定め、石室の形態と規模を確認するために、主軸に平行するトレンチと主軸に直行するトレンチを設定した結果、主軸平行トレンチ内東端に沿って一直線状に並んだ石室の側壁を確認することができた。しかし、トレンチの幅を1mに設定したことと、側壁西側の石室に当たる部分に大量の破壊された礫が密集して投げ込まれていたことから、石室内の掘り下げは難航し、この年は石室東壁を確認するだけに留まった。

三年目に当たる2011年度は発掘範囲を西側と北側に広げた結果、新たに石室の西側壁と奥壁を確認することができた。ただし、漢道を含めた石室全体が破壊され砕かれた石材に埋め尽くされており、これら破壊された大型の石材を取り除くために重機も動員したが、この総量は夥しく、かつてここに存在した横穴式石室の規模とこの構築に用いられた石の数量、破壊の大きさを改めて再認識させられることとなった。調査はまだ完了していないが、F9号墳の石室が穂高古墳群中でも有数の規模であったことを推測させるに十分なものであった。なお、この年はそれまで8月上旬に行っていた調査を8月後半に実施したこともあって天候に恵まれず、順調に調査を行えたのは予定していた期間の半数にも満たず、最後は石室の実測に追われることとなった。

しかし、幸いにも大規模に破壊された時の破壊された石と攪乱土はほぼ取り除くことができた。次年度以降は、古墳が築かれてから大規模に破壊される前に堆積した土の精査に取り掛かることができる条件が整ったため、本格的な発掘に取り掛かれるようになったことは、大きな成果といえよう。

他方、9号墳の発掘と併行して穂高古墳群全体の現状を確認し、後世に伝え残すための現状確認調査も行ってきた。貴重な文化遺産の保護に対して我々ができることは限られているが、その一助になれば幸いである。

最後になりましたが、調査開始から今日まで国土交通省関東地方整備局、アルプスあづみの公園管理JV、長野県教育委員会、安曇野市教育委員会、あづみの公園歴史愛好会をはじめとする実に多くの機関や、桐原健先生をはじめとする多数の個人から多大なご助力とご支援を頂いてきましたことに対して、心よりお礼を申し上げます。

2012(平成24)年6月26日
國學院大學考古学研究室
吉田 恵二

例 言

1. 本書は長野県安曇野市穂高高原に所在する穂高古墳群F9号墳発掘調査の記録である。
2. 本調査は2011年度國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環として、2011年8月20日から同年8月29日までの10日間にわたり実施したものである。
3. 本調査は赤井益久(國學院大學学長)が主体者となり、吉田恵二(文学部教授)が担当した。現地調査は吉田および深澤太郎(研究開発推進機構助教)・中村耕作(文学部助手)が指導にあたり、齋藤 唯・山口 晃(大学院ティーチングアシスタント)の下、考古学実習生9名・特別参加生28名が参加した。調査にあたっては谷口康浩(文学部教授)・柳田康雄(文学部教授)・小林青樹(國學院大學橋本短期大学教授)の指導・協力を得た。
4. 現地調査および整理作業においては多数の機関や個人から協力を得た。芳名を巻末に記して感謝の意を表す。
5. 実測図、その他の諸図版作成、および写真撮影は考古学実習生が主体となって行った。
6. 本書の編集・執筆は、吉田・中村の指導の下に実習生が協議・分担した。
7. 個々の古墳の表記方法については、過去の調査研究に準拠して「所属支群を示すアルファベット+通し番号」で松川村所在古墳を除くすべての古墳を表記し、またそれ以外に別称を持つ場合には過去の文献との整合を容易にするため、括弧付けでこれを表記した。
8. 今回発掘調査を行ったF9号墳はF10号墳とともに2基の総称として「二塚塚」の別称を持っている。そのため、どちらかを単独で表記する場合に別称を表記するのは適当ではないと判断し、また文章中で多用することを考慮して、本報告書では両古墳に限り別称の表記を省略する。
9. 安曇野市域では2005年の安曇野市発足に至るまで数度の合併・改称が行われている。1889年、市町村制施行に伴い南安曇郡東穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が発足、1921年に南安曇郡東穂高村が改称して南安曇郡穂高村が発足した。1954年に南安曇郡穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が合併して南安曇郡穂高町が発足したのち、2005年には南安曇郡豊科町・穂高町・三郷村・堀金村と東筑摩郡明科町が合併して安曇野市が発足した。本文中では、旧町村名の表記が必要な場合のみ「旧」を頭につけてこれを表記した。

目 次

緒言
例言
目次

第 I 章 調査・研究の目的	頁
第 1 節 調査・研究の目的	(橋本梨紗) 1
第 2 節 穂高古墳群の位置づけ	(橋本梨紗) 1
(1) 長野県内の古墳と穂高古墳群	1
(2) 古墳群の研究と穂高古墳群	2
第 II 章 発掘調査日誌	(酒匂喜洋) 4
第 III 章 遺跡の位置と歴史的環境	
第 1 節 穂高地域の地理的環境	(酒匂喜洋) 6
(1) 穂高地域の概要	6
(2) 扇状地の特徴	7
(3) 調査地の地形・地質	8
第 2 節 歴史的環境	(西野秀知・牧野悠人) 10
(1) 旧石器時代	10
(2) 縄文時代	10
(3) 弥生時代	11
(4) 古墳時代	14
(5) 古代	17
第 3 節 穂高古墳群の概要	(岩井優莉佳) 21
第 IV 章 穂高古墳群F9号墳の調査	
第 1 節 調査の経過	(鶴崎明音) 26
(1) 調査地の概要	26
(2) 2010年度までの調査の成果	26
(3) 2011年度の調査の経過	26
第 2 節 石 室	(関明日美) 28
第 3 節 出土遺物	(酒匂喜洋) 30
(1) 古墳時代～古代の遺物	30
(2) 中世以降の遺物	31
第 V 章 2011年度調査の成果	
(1) 石 室	(猪瀬亜沙美) 33
(2) 出土遺物	(酒匂喜洋) 33

第VI章 おわりにあたって	34
---------------	----

引用・参考文献	35
発掘調査参加者・関係者一覧	40
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

	頁		頁
第1図 長野県の主要古墳と古代寺院	2	第8図 穂高古墳群の主要石室	23
第2図 松本平の位置	6	第9図 穂高古墳群出土の主要遺物	24
第3図 安曇野市周辺地質分布図	9	第10図 2010年度～2011年度調査区全体図	27
第4図 烏川段丘分布図	9	第11図 調査区南側土層断面図	28
第5図 F9号墳南側付近柱状図	9	第12図 石室実測図	29
第6図 松本平の主要遺跡	13	第13図 F9号墳出土遺物実測図	32
第7図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡	20	第14図 筑摩東山窯跡群上ノ山14地区出土杯	33

表目次

第1表 松本平主要遺跡の消長	12
----------------	----

写真図版

図版1 1 墳丘全景(東から)	2 A9・A10グリッド東壁(西から)
2 墳丘全景(南西から)	図版7 1 C1・C2グリッド西壁(東から)
図版2 1 トレンチ全景(南から)	2 C3・C4グリッド西壁(東から)
図版3 1 トレンチ全景(北から)	図版8 1 C5・C6グリッド西壁(東から)
図版4 1 奥壁(南から)	2 C7・C8グリッド西壁(東から)
2 A1・A2グリッド東壁(西から)	図版9 1 C9・C10グリッド西壁(東から)
図版5 1 A3・A4グリッド東壁(西から)	2 埋め戻し後全景(南東から)
2 A5・A6グリッド東壁(西から)	図版10 1 F9号墳出土土器
図版6 1 A7・A8グリッド東壁(西から)	図版11 1 F9号墳出土土器・切子玉・近世陶器・硬貨・釘

第1章 調査・研究の目的

第1節 調査・研究の目的

國學院大學考古学研究室では考古学実習の一環として、長野県安曇野市を中心に所在する徳高古墳群を2009(平成21)年度から新たな調査対象地に定めた。徳高古墳群は長野県安曇野市西部、標高600m～700mの烏川と中房川の扇状地上の山麓に点在する古墳の総称で、長野市大室古墳群や松本市中山古墳群とともに長野県を代表する群集墳である。大きくA群～H群の各支群からなり、現在87基以上の古墳が確認されている。

明治時代の報告以来、その名は周知されていたが、本格的な調査は行われていなかった。1940年代に長野県教育委員会によって古墳の分布調査が行われたが、1930年代に確認された数を大きく下回った。1964年から1970年にかけて、徳高町教育委員会によって旧徳高町域内の古墳の分布確認調査と、確認された古墳に対する古墳名を記した石製標柱設置を実施し、本格的な古墳群の保護対策が取り組まれはじめた。同時期の1967年に行われた長野県教育委員会による調査ではより正確な資料整備へと進み、旧徳高町内の古墳は大きくA～G群の7群に大別され、その大要がようやく把握されはじめた。これだけの規模の古墳群でありながらまとまった学術調査がない点を考慮し、1982年には「長野県史」編纂事業の一環として、岩崎卓也を中心とする筑波大学考古学研究室によって一部の古墳の墳丘・石室・出土遺物の実測調査が行われた。1991年には「徳高町誌」編纂事業にともない桐原健が全体像をまとめ、また同年には三木弘によりE6号墳の研究も行われている。

上記以外にも過去に何度かの調査が行われているが、徳高古墳群全体としての情報が把握しづらいのが現状である。その要因として、各研究者・調査主体者の視点の相違、土地開発や盗掘などの人為的要因による古墳の破壊・減少および、調査年によって確認された古墳数に差が生じていたことが挙げられる。また、これまでの調査はA群・B群など徳高古墳群北部に分布している古墳を中心に行われており、古墳群南部の調査はあまり行われていなかった。

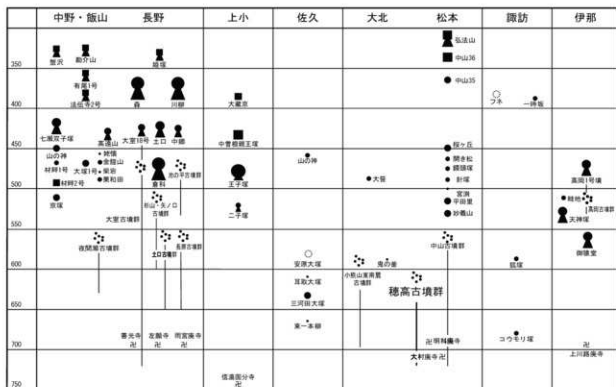
以上の状況を踏まえ当研究室では、徳高古墳群南部に分布するF群の中からF9号墳・F10号墳を調査地とした。これまで徳高古墳群において行われてこなかった墳丘・石室・遺物を一体とした調査によって、墳丘と石室の規模と構築方法、出土品の種類や年代を総合的に把握することを目的とする。多少の破壊はあるものの、F群の中では保存状態が良好な両古墳は本調査に適しており、継続的な学術調査および古墳群を構成する個々の古墳の現存状況を確認することで、徳高古墳群が持つ地域性あるいは独自性を明確にしていきたい。F9号墳・F10号墳は同宮アルプスあづみの公園内に位置することから、今後も土地開発の影響を受ける可能性は低いと考えられる。この立地を生かして両古墳をより良く保存し、徳高古墳群の歴史的意義を近隣住民のみならず後世の人々に広く伝えることが肝要である。

今年度は昨年度調査に引き続き、F9号墳石室内部の発掘調査を行った。石室の全体像を把握するために昨年度掘り下げた第Iトレンチ(幅1m・長さ10m)を復原し、トレンチ北側を0.5m、西側を1.5m拡張して、石室・羨道部側壁の幅・高さ・長さの計測を行った。

第2節 徳高古墳群の位置づけ

(1) 長野県内の古墳と徳高古墳群

長野県には松本・伊那・佐久・善光寺の4つの盆地があり、それぞれ中信・南信・東信・北信に区別され、独自の地域圏を成している。県内には約3000基の古墳が存在し、全体の約70%は善光寺平と伊那谷に集中している。長野県内最古の古墳は3世紀後半に造られたとされる松本市弘法山古墳であるが、飯山市勘介山古墳、中野市蟹沢古墳、千曲市森将軍塚古墳、長野市塚塚古墳・川柳将軍塚古墳など、前期古墳の多くは善光寺平に位置する。森将軍塚古墳や川柳将軍塚古墳が築造された前期後半には、前方後方墳から前方後円墳への変化と、墳丘の大型



第1図 長野県の主要古墳と古代寺院
(小林1997をもとに加除筆して作成：國學院大學文学部考古学研究室編2011)

化の傾向が見られるようになる。中期以降も善光寺平中央部を中心に前方後円墳が築造され、中野市七瀬双子塚古墳・高遠山古墳、千曲市土口將軍塚古墳・倉科將軍塚古墳など大型の前方後円墳が主流になるが、一方でこの頃から各地で円墳が集中的に造られはじめる。松本市の桜ヶ丘古墳・針塚古墳もその一例である。中期には分布の中心を伊那谷に移し、前方後円墳が築造され、墳丘の規模が大きくなると共に副葬品も充実する。その後大型の古墳は徐々に姿を消し、これまでよりも小規模の円墳が盛んに造られるようになり、長野市大塚古墳群、松本市中山古墳群、安曇野市穂高古墳群のような古墳群が形成されていった。

松本平には300基以上の古墳があり、安曇野市の旧穂高町域には小規模の円墳が87基以上点在している。集中して分布していることから群集墳とされ、穂高古墳群と呼ばれている。現状では全て円墳であり、内部主体は一部の例外を除いて横穴式石室のものがほとんどであり、長野県の古墳の特徴でもある馬具や須恵器が出土していることから、古墳時代後期の古墳群と考えられている。

(2) 古墳群の研究と穂高古墳群

古墳時代の時期区分において、横穴式石室の使用と普及、須恵器の地方窯の成立、新種馬具の登場など、後期への転換にはいくつかの指標がある。群集墳の全国的発生もその1つである(森・石部1962)。古墳を群として研究しようという動きは戦前から見られたが、近藤義郎が「佐良山古墳群の研究」(近藤編1952)のなかで、「古墳時代後期における横穴式石室をもつ小型円墳群」を群集墳と定義したことによって群集墳という用語が定着した。このなかで示された群集墳に家父長制の発生を見出した見解は、戦後の群集墳研究の軸となった。これに対して西嶋定生(西嶋1961)の国家制度的な群集墳論は、階級制度の位置づけを示すことになった。これらの群集墳論の発表以降、群集墳を構成する単位群・小支群・支群・古墳群の地域とのつながりを戸・里・郡・クニに対応させた向坂鋼二(向坂1964)や、単位群の結びつきの違いに群集墳の性格の違いが反映しているとした水野正好(水野1970・1975)、大型古墳との対比による群集墳の形成を指摘した白石太一郎(白石1973)、横穴式石室を持たない

小型墳丘墓と区別するために古式群集墳や後期群集墳などさらに定義を細分化し、群集墳としての対象の確立を問題としてきた石部正志(石部1980)や和田晴吾(和田1990・2007)、地域間格差や群集墳内の格差を武器から比較した新納泉(新納1983)など、群集墳の研究が盛んに行われていく。

徳高古墳群については、支群ごとに集落遺跡と対応させて被葬者の居住地の推定を試みた桐原健(桐原1991・1996・2004)、副葬品の差異や追葬年代を通して、徳高古墳群をめぐる研究成果の概観を古墳群の範囲や形成時期、周辺集落との関係や被葬者の問題についてまとめた三木弘(三木・寺島・西山1987・三木1990・1991・2006)などにより、発掘調査が行われるようになった1980年代以後各古墳群の実態が明らかになってきた。

現時点では徳高古墳群の首長墓は確認されていないが、1987年に奈良県藤ノ木古墳の発掘調査で出土した金銅製冠に表現されている鳥形の装飾と酷似した「鳳凰形銅葉」とされる遺物が、明治20年代に徳高古墳群のいずれかから出土していたことが明らかになっている(第9図6)。両者の鳥形は非常に形が似ており、藤ノ木古墳出土の金銅製冠の一部ではないかとも言われている(徳高町・徳高町教育委員会編1989)。金銅製冠はあまり出土例が無く、全国でも三十数か所ではしか確認されていない。これらは5世紀後半から6世紀に築造された古墳から出土しており、松本平でも5世紀中頃の桜ヶ丘古墳から金銅製冠が出土している。冠は権力を表す象徴として使用されていたが、この当時はまだ冠位制度が成立しておらず、各地で出土している冠にも共通点がほとんど見られない。鳥形の遺物が出土した徳高古墳群は、この地域の生活環境や政治的な様子を知る上で重要な資料といえる。

後期以降、大化の薄葬令によって古墳の築造が制限され、古墳時代は終わりを迎えることになる。地方では薄葬令が伝わるまで古墳の築造は行われていたと推測されるため、長野県における古墳時代の終わりは8世紀から9世紀にも下る可能性がある。薄葬令の施行以後、権力の象徴が古墳の築造から寺院の建築に移行し、急速に寺院が建立されるようになる。徳高古墳群の対岸にある安曇野市明科庵寺から7世紀後半の瓦が確認されており、長野県内最古の寺院と考えられている。このほかにも長野県内には長野市の善光寺周辺(7世紀後半～9世紀)、千曲市の兩宮庵寺(7世紀後半～8世紀初頭)、須坂市の左願寺庵寺(7世紀後半～8世紀前半)、飯田市の上川路庵寺(7世紀後半)など、7世紀代に建立された初期仏教寺院が確認されている(上田市立信濃国分寺資料館編2005)。また、明科庵寺で出土した軒丸瓦と類似するものが滋賀県、岐阜県、山梨県から出土している。白鳳時代に建立された寺院は、地方豪族の氏寺として豪族の本貫地に建立されるのを大きな特徴としている。この特徴からすると、明科庵寺はこの地域を支配する豪族の根拠地に建立された氏寺ということになる(明科町教育委員会編2000)。また、この頃に信濃に東山道が開通したことから、それに伴って造瓦技術の伝播や仏教信仰が広く浸透していった背景がうかがえる。

(橋本)

第二章 発掘調査日誌

8月20日(土) 雨

先遣隊が午前中からグリッド設定を行う予定であったが、雨のため本格的な作業は開始できなかった。そこで、昨年度設置した基準点の検測を行い、墳丘周辺に新たな測量基準点を設置した。

実習生は13時40分に穂高駅へ集合してから宿舎へ移動し、先遣隊と合流した。その後実習生は2班に分かれて安曇野市穂高郷土資料館・D1号墳(魏石鬼窟)・A1号墳(陵塚)など穂高地域の資料館・遺跡を見学した。

8月21日(日) 曇り

調査開始前に墳丘全景の写真撮影及びミーティングを行い、2010年度実習生からF9・F10号墳の概要の説明を受ける。その後グリッドを再設定し、いよいよ昨年度の第IトレンチにあたるA列の1～10グリッドから調査を開始した。

まずトレンチ内に保存のために入れていた土嚢袋を取り外し、石室東壁と思われる列石が確認できるよう、昨年度調査時の状況に第Iトレンチを復原した。更に西側へ1m拡張したB列の1～10グリッドも掘り下げたところ、B列西端から石室西壁の一部と思われる石が数箇所から検出されはじめた。

8月22日(月) 雨時々曇り

前日に引き続き、昨年度調査したA列と深さが等しくなるようにB列を掘り下げる。途中、雨とズズメバチの駆除により作業が中断したためトレンチの掘り下げはあまり進まなかったが、前日B列西端から検出した複数の石がA列の列石と対をなすように並んでいることがわかり、石室西壁の一部であることが判明した。これにより石室の両側壁が残存していることが確認できた。

8月23日(火) 雨

善光寺平・松本平の史跡・資料館見学のため実習生1班は大室古墳群、森将軍塚古墳、長野県立歴史館、松本市立考古博物館、弘法山古墳などを見学する。2班は引き続き作業にあたったが、雨が激しかったため午前中の作業を中止し、ワサビ畑を始めとする穂高地域の地理・産業の見学をした。しかし昼過ぎには雨が止んだため、午後からは作業を再開し、西壁の残存状況を確認するために引き続きB列の精査を行った。

8月24日(水) 晴れ

本日は実習生2班が史跡・資料館見学へ向かい、前日の1班と同じ史跡・資料館に加え松本城を見学した。一方、現場ではB列を中心にトレンチの掘り下げを継続した結果、西壁の石材が2段に重なっていることが確認できた。

西壁の構造や石材の大きさをより詳しく調査するため、さらに西側のC列へとトレンチ幅を0.5m拡張した。





8月25日(木) 雨

前日検出したC列の西壁上面を引き続き掘り下げる。しかし雨が激しくなったため途中で調査を切り上げ、拡張後の様子を記録するため現時点でのトレンチ全景を写真撮影し、午前中で作業を中止した。午後は宿舎に戻り、記録写真の確認・整理と機材の点検などを行った。

8月26日(金) 曇り

前日中断したC列の掘り下げを引き続き行い、西壁上面の精査を完了した。トレンチ内には石室の一部が破壊されたときのものと思われる大きめの石材が大量に埋設していたので、掘り下げを中断して、一つずつ外へ運びだしながら底面を整えるように精査を継続した。この際A1～C1グリッド付近に埋設した石材は人力で運び出せず、翌日重機を用いて除去することにした。さらにトレンチを北に0.5m拡張したところ、北端から奥壁の一部を確認した。

本日は長野県文化財審議会委員の桐原健先生と大阪府教育委員会の三木弘先生が来跡し、吉田恵二教授により現時点での調査の過程について説明が行われた。

8月27日(土) 晴れ

『市民タイムス』に「国営公園で水晶発掘 国学院大古墳の石室調査」という見出しで、前日出土した切子玉を中心に今年度の調査成果が掲載される。本日から国学院大学栃木短期大学の小林青樹教授も調査指導に加わっていた。

前日引き上げられず調査の障害となっていた大型の石材をクレーンで引き抜き、墳丘の臨へ移動させた。これと並行して現場に山砂もトラックで搬入し、翌日の埋め戻しに備えて土嚢袋に詰めた。その後トレンチ内全体の清掃を行い、写真撮影・遺構実測の準備に取りかかる。同日中にトレンチ全景及び各部分の記録用写真撮影が完了した。実測は日没が迫ったので翌日に行くこととなった。

8月28日(日) 晴れ

再度、確認用写真の撮影とトレンチ内の清掃を行った後、平面と石室内東・西・北の各立面の実測をする。実測はトレンチ内の主軸を石室の主軸に合わせるためにずらしてから行った。なお、石室残存部側面の一部は凹凸が激しいため、実測用レベルを水系で設定せずに、光波測距儀で計測したレベル高をチョークでマーキングして設定した。実測後、前日用意した土嚢を用いて石室を埋め戻す。埋め戻し後の写真撮影をして、現場から機材を撤収した。

8月29日(月) 晴れ

機材の点検・清掃と整理を宿舎で行う。宿舎でミーティングと集合写真を撮影した後に松本駅に車で移動して解散し、それぞれ帰路についた。

(酒匂)



第三章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 穂高地域の地理的環境

(1) 穂高地域の概要

松本平の地形

長野県は本州中央部に位置する内陸県であり、大きさは南北約212km、東西約120km、総面積約13,562km²に及び、全国で4番目の広さを誇る。山地が大半を占める県内は主要河川流域にいくつかの盆地が展開しており、調査地の所在する松本平もその一つである(第2図)。松本平は北部の大町市から南部の塩尻市までほぼ北北西から南南東の方向に伸びる楕円形の地形で、中央をフォッサマグナの西縁にあたる糸魚川-静岡構造線が縦貫している。

松本平の東側には標高1,000m~1,500m程の緩やかな丘陵地帯である筑摩山地が広がり、西側には標高約3,000m級の急峻な飛騨山脈が立ち並ぶ。飛騨山脈の山々を源とするいくつかの河川は松本平に複合扇状地を形成しており、その扇尖から扇端には各時代の遺跡が分散している。松本平を流れる大小すべての河川は最終的に北側の高瀬川と南側の犀川へ集まり、盆地の底部にあたる安曇野市明科地域の標高約520m付近で合流してから盆地の外へと流れ出す。

松本平の形成

松本平の形成は飛騨山脈とフォッサマグナの成立と深くかかわっている。日本列島の全身となる陸地は新生代古第三紀(約6,500万年前~2,300万年前)まで東西に分かれており、その間には海が広がっていた。この東西の陸地に挟まれた海溝が新第三紀(約2,300万年前~250万年前)から堆積を始めたことで造られた地帯がいわゆるフォッサマグナである。

形成の原因や過程は詳しく解明されていないが、新第三紀末から第四紀(250万年前~現在)になるころには海が無くなり、陸地に変化した。この陸化したフォッサマグナに新第三紀よりも前に形成された西側の地域の土砂が流れ出して堆積し、約100万年前~70万年前に平坦面が形成された。

この新第三紀以降に形成された陸地とフォッサマグナ側の境界にあたるのが糸魚川-静岡構造線である。フォッサマグナに平坦面が作られた頃から、糸魚川-静岡構造線を境に西側は急激に隆起して飛騨山脈となり、西側は間欠的に隆起をして筑摩山地となった。そして双方の隆起の影響を受けて糸魚川-静岡構造線の一帯は約60万年~50万年前から陥没するようになり、松本平の原形がつくられた。

穂高地域の環境

この松本平に所在するのが本調査地である安曇野市穂高地域(旧穂高町)である。穂高地域は東西約20km、南北約11kmの東西に長い地域である。地域面積の約7割が日本アルプス国立公園の山岳地帯に属しており、西境には地域内最高峰である標高2,922mの大天井岳をはじめとする飛騨山脈の尾根が並ぶ。山岳地帯の豊富な降水量によって流された土砂は地域東部の松本平に運ばれて沖積地を形成し、穂高地域の生活・産業の拠点となっている。東端は犀川・高瀬川・穂高川などの河川が密集し、氾濫原が形成されている地帯である。この東端の氾濫原は豊富な量の水が湧き出るため、現在では地域の特産であるワサビが栽培されている。



第2図 松本平の位置

西端から東端までの距離は最大20km程度であるが、標高差が約2,400mに及ぶため域内の気温差は大きく、西端の大天井岳と東部にある市街地の年間平均気温は10℃近く異なる。また飛騨山脈は冬季に偏西風で運ばれてくる雪雲が尾根に当たり、豪雪地帯となるため降水量が多いのに対し、盆地内である市街地は周囲の山に雨雲・雪雲が阻まれるため、海に近い地方に比べ年間降水量が少なく、いわゆる内陸性気候の特徴をよく表した地域である。

このような気候のため生育する植物にはチングルマ、トウヤクリンドウなどの高山帯特有のものからオオバコ、シロツメクサ、ススキなど本州各地に分布するものまで幅広い種類が見られる(保尊1991)。また動物も多様であり、山中から市街地、様々な河川の上流・下流に至るまで地域中のいたるところに生息する。

(2) 扇状地の特徴

飛騨山脈を背景とする徳高地域には大小多数の河川があるが、地域の主要河川といえるのは北部を流れる中房川と南部を流れる烏川である(第3図)。両河川が形成する扇状地は徳高地域の沖積地のほとんどを占めており、徳高古墳群も両扇状地の扇端部から扇中部にかけて分布している。

中房川扇状地

中房川は大町市との境界に近い徳高有明地区の東沢乗越付近を源にし、乳川と合流して徳高川(乳房川)になるまでの全長約16.1kmの河川である。山地内の流域面積は57km²に及び、山地内には盛んな浸食活動により岩盤を削ったV字谷が形成されている。この流域の大半が有明山花崗岩と呼ばれる岩盤の地帯であるため、花崗岩類を中心とした礫類が下流へ運ばれ、山岳地帯の出口である徳高有明地区の宮城から矢村周辺の河床には大きな河床礫がみられる。中には径が5mを超えるものもあるため、地元ではこの花崗岩類の礫が古くから様々な形で利用されており、徳高古墳群の石室としても用いられた。

中房川扇状地は徳高有明地区の平地の殆どを占める扇状地である。面積は約23km²、扇頂部は宮城の標高約750m付近である。複合扇状地であるが、近接する扇状地の影響をあまり受けていないためほぼ180度の方向に広がる。また扇状地の中央部を貫流する水路の油川より北側の扇頂部から扇中部は耕作不能地が多く、旧河川跡がそのままツ・ナラ・クスギなどの林に覆われている。

扇状地内の堆積物を比較すると、扇頂部周辺に存在した大きな礫が下流に進むほど見られなくなり、扇中部では粗粒砂と混在した長径5cm~30cmの礫へと変化し、扇端部に至ると灰白色シルト層を間に挟んだ中粒から細粒の砂になる。これは風化しやすい特質が後背地の花崗岩地帯にあるからである(仁科1991)。

烏川扇状地

烏川は蝶ヶ岳を源とする蝶ヶ沢を本流とする河川であり、全長は徳高川に合流するまでの約16kmである。山地内の流域面積約69km²の河川である。数段の河岸段丘が発達している。伊藤真人はこの河岸段丘を5段に分類しているが、『徳高町誌 自然編』では4段で説明している(伊藤1983、仁科1991)。ここでは双方の資料を参考にして第1段丘~第4段丘に区分し、更に第2段丘を大平面と離山面に細分して説明する(第4図)。第3段丘までは上流域の急峻な山々の谷間に入り組むように分布しているのに対し、最も低い位置にある第4段丘は堀金烏川地区須砂渡付近で松本平へ展開して扇状地状の広がりを見せる。

烏川第4段丘の扇状地を形成したのは、約2万年前~1万年前に須砂渡からやや南東の方向に下降していた旧烏川本流であった。しかし今から約1万年前から旧烏川左岸の岩盤が削られはじめ、須砂渡から北東の方向へ本流の進路が変わった。この本流の変化によって第4段丘の扇状地に重なるような形で現在の烏川扇状地と河床の形成が始まったとされる(重野2007)。

つまり広義に解釈すれば須砂渡より下流にある第4段丘の扇状地と現扇状地・河床面を合わせて烏川扇状地とすることも可能であるが、厳密に言えば烏川扇状地と呼ばれる範囲に烏川第4段丘の扇状地は含まれていないことになる。このため烏川扇状地と呼ばれる範囲は文献によって多少の差があるが、前者の範囲で認識されることがよくあり、後者の厳密な範囲を適用すると地理的な説明をする際に混乱が生じる。よって、本文中で扱う烏川扇状地の範囲は一般的に認識されている、烏川第4段丘が形成した範囲も含むことを基本とする。

烏川扇状地は徳高有明地区の富田から同地区橋爪で北側の中房川扇状地と接し、南は堀金三田地区の田多井で

黒沢川扇状地に接する複合扇状地である。また扇端はJR大糸線周辺から穂高地域中心地の東側まで伸びるとされ、推定される扇状地面積は最大で約30km²になる。

上流の山岳地帯は粘板岩・チャート・ホルンフェルスなど主に堆積岩から形成されている。このような上流の地質の影響で河床には黒っぽい礫が多く堆積しており、この河床の色が河川名になったとする説まである。河床礫の層の厚さは扇状部の富田で地表から約15mに及ぶ。河床が吸水性のある粗粒物質であるため穂高地区の上流の北で烏川の水量は減少し、雨の少ない時期には下流で流水が見られない時もある(仁科1991)。そのため扇状部には古代の遺跡が少なく、この付近の開発は近世に農業用水路が作られるまであまり進まなかった。浸透した水はより標高の低い扇端部で再び湧き出ており、これが一因となって扇端部に各時代の集落遺跡が多く集まる。

明科地域との比較

穂高地域の特徴は犀川対岸の明科地域(旧明科町)と比較することができる。明科地域は松本平を流れる河川の出口であり、松本平と善光寺平を結ぶ陸運・水運の要所である。地域内には湖古墳群と呼ばれる古墳時代後期から古代にかけての古墳群や信州最古の寺院である明科庵寺などが所在しており、古代安曇野の歴史を検討する上で重要な場所である。

当地域は松本平で最も標高が低い地点であり、犀川・高瀬川と筑摩山地に挟まれているため、穂高地域などに比べると平地の面積は狭く、犀川・高瀬川の流域には河岸段丘が発達している。また後背地となる山々が異なり、明科地域の背景にある筑摩山地は新第三紀のフォッサマグナが海であった頃に海底に沈んだ泥や砂が堆積して形成されたため、明科地域は弱い細粒物が多く堆積し、穂高地域と比べると侵食されやすい地質である。

このような地形・地質の明科地域では遺跡の多くが山麓部から離れた犀川の低位段丘にあり、特に河川が大きく曲流する位置の内側に立地する。しかし、明科庵寺などがある現在の明科駅周辺の地区は粘土質で水はけが悪い土地であったようで、開発されたのは古墳時代以降である。

(3) 調査地の地形・地質

調査地付近の流路

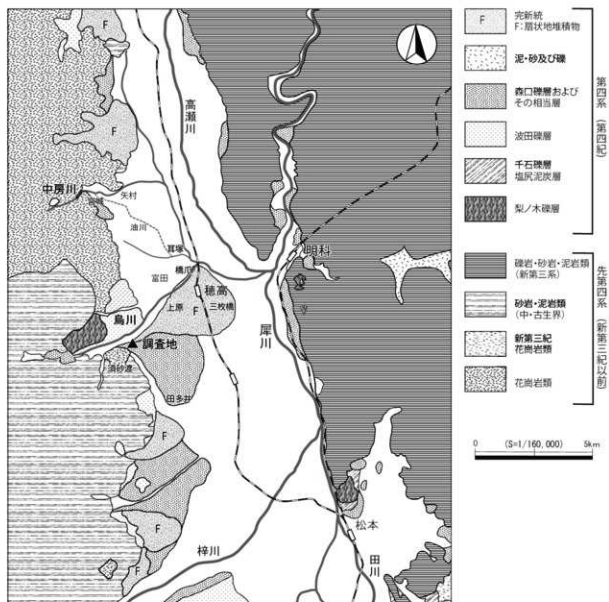
本調査地は溪谷の出口から約700m下流の烏川第4段丘の上に位置することから、烏川扇状地のほぼ扇頂部といえる場所である。そのため、かつて調査地付近には烏川本流から分岐した複数の自然流路が存在していた。その自然流路の一つに矢原沢と呼ばれる沢があり、そのすぐ脇に沿うようにF10・F9・F8号墳が造られたと考えられている(重野2007)。矢原沢は後世に用水路として改修され、現在では調査地の南側を流れているが、F10・F9号墳の約30m北側にある東西方向に伸びる溝状の窪地が、自然流路としての矢原沢の流路跡とみられる。

このように複数の水路がある扇頂部は上流の水量が増えると洪水が発生しやすい場所であったようであり、微地形環境分析によると烏川は紀元前1世紀と紀元後10世紀に大規模な洪水が発生したとみられる。特に10世紀の大洪水では扇頂部周辺の自然流路も氾濫し、堆積した土砂で流路が埋没した沢もあった。この際に矢原沢は埋没する程の氾濫をしなかったが、最も近かったF8号墳が壊滅的な被害を受けたとされる(重野2007)。

調査地点の地質

1996年10月に国営アルプスあづみの公園の開発に先立ち、長野県埋蔵文化財センターがF9号墳の約50m南側で土層の確認調査を実施している(第5図)。I層～IV層が検出されたが、I層、II層が近世以降の層で、III層が本来の表土であることがわかった。旧表土は土壌化の進度の違いから、a層～c層に分けられており、a層は火山灰起源の黒ボク土で縄文時代から近世の遺物が微量出土し、腐植と砂礫を含んだ褐色土のb層からは縄文時代や古墳時代の土器が出土しているが、c層とその下のIV層からは遺物が出土していない(長野県埋蔵文化財センター編1997)。このIII a層以下と特徴が近い層が本学による2010年度のF9号墳西側の土層確認調査でも検出されているが(國學院大学考古学研究室編2011)、あくまで部分的な確認であるので、まったく同じ地層・層序であるのかは判断が難しい。

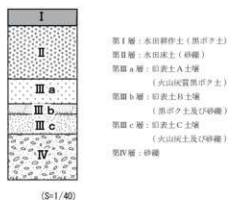
(酒匂)



第3図 安曇野市周辺地質分布図 (松本盆地団体研究グループ 1977 を改変)



第4図 烏川段丘分布図 (伊藤 1983 を改編)



第5図 F9号墳南側付近柱状図
(長野県埋蔵文化財センター編 1997 を改編)

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器時代

松本平には旧石器時代の遺跡は少ないが、塩尻市和手遺跡ではローム層上とローム層中からナイフ形石器26点と槍先尖頭器6点などが広範囲から出土している(塩尻市教育委員会編1988)。

(2) 縄文時代

草創期・早期

縄文時代草創期の遺跡は松本平では数点の有舌尖頭器が確認される程度で不明な部分が多い。早期には主に大町市山の神遺跡、塩尻市矢口遺跡・向陽台遺跡などの集落遺跡が営まれ、これらの堅穴住居は高原や山麓の台地、河岸段丘に多く見られる。山の神遺跡はコの字型になった方形配石跡や異形局部磨製石器が41点出土していることから、全国的にも特殊な遺跡と言える(長野県埋蔵文化センター編2003)。片丘丘陵上に位置する矢口遺跡では堅穴住居が16軒検出され、松本平では最も古い炉を有する堅穴住居が環状に検出されていることから確立期の集落の解明に役立つものと考えられている(塩尻市教育委員会編1994)。北側と南側を深く開削された舌状台地に立地する向陽台遺跡では早期前半の押型土器を主体とする堅穴住居が4軒検出されており、そのうち3号住居は直径9mもある非常に大きな堅穴住居である(塩尻市教育委員会編1988)。

前期

松本平の縄文時代前期の遺跡は早期と比較すると増加傾向にあり、大町市上原遺跡、松川村有明神社遺跡、塩尻市剪屋敷遺跡・女夫山ノ神遺跡などの堅穴住居は山麓や台地に多く見られ、早期には見られなかった大規模な集落が展開した。

舌状の台地に立地する上原遺跡では球状耳飾り、滑石製飾玉、石匙、石刃などが出土し、また環状列石の石が倒れた状態で検出されている(長野県文化財保護協会編1976)。有明神社遺跡では集石ユニットでの遺物の包含率が高く、焼土も含まれていた(松川村教育委員会編1968)。剪屋敷遺跡では縄文時代前期の堅穴住居が6軒検出され、彫彩土製品、ミニチュア土器、ヒスイ製球状耳飾りが出土した(塩尻市教育委員会編1982)。塩尻市の東方に南北に延びる片丘丘陵上に位置する女夫山ノ神遺跡では堅穴住居が傾斜地に27軒検出されており、住居の配列が特異で弧状に配列された状態で検出されていることから、前期から中期への住居の変遷を見る上で重要である(塩尻市教育委員会編2002)。

中期

縄文時代中期では特に後半を中心とした大規模な遺跡が発見されており、遺跡数も縄文時代を通してこの時期が最も多い。西山山麓では松川村南の原A地点遺跡、安曇野市他谷遺跡・東小倉遺跡、山形村淀の内遺跡・三夜塚遺跡、朝日村熊久保遺跡、東山山麓では安曇野市ほうろく屋敷跡・塩田若宮、塩尻市祖原遺跡・北原遺跡・平出遺跡、松本市坪ノ内遺跡・大村塚田遺跡・一ツ家遺跡などの集落が営まれており、大規模な遺跡の多くは南部の東山山麓と西山山麓にある。

中房川左岸段丘上にある南の原A地点遺跡では検出された堅穴住居は不完全なものを含めて4軒で、遺物は石鏃、打製石斧、土器円盤など見つかった(松川村教育委員会編1993)。烏川扇状地上にある他谷遺跡では堅穴住居が45軒検出されたうち5軒が敷石住居であり、またそのうちの1軒から広耳付壺形土器が出土している(穂高町教育委員会編2001)。北アルプス山麓の黒沢川扇状地の東部に立地する東小倉遺跡では土器、石器、土偶などが大量に出土し、また堅穴住居も53軒が検出されており、当時の人々の生活を窺い知ることができる(三郷村教育委員会編1999・2003・2005、安曇野市教育委員会編2006・2012)。塩田若宮遺跡では第1次、第2次調査が行われており、敷石住居と思われるものが2軒と堅穴住居が7軒検出されている(明科町教育委員会編1997、安曇野市教育委員会編2011)。ほうろく屋敷跡では中期の堅穴住居が62軒検出されている。また、配石遺構を伴う土器棺再葬墓が出土している(明科町教育委員会編1991)。淀の内遺跡ではヒスイ製大珠やヒスイの原石、ヒスイの剥片など出土していることから、ヒスイの加工を行っていたと推察されている(山形村教育委員会編1997・

2001)。梓川扇状地の最南端に近く、旧河川と思われる凹地の周辺にある三夜塚遺跡では局部磨製石斧、石棒、凹石、石匙、石槍、石剣、土偶、滑石製勾玉など多種多様な物が出土している(山形村教育委員会編1981・1982・2002・2009)。鎖川左岸段丘の中段に位置する熊久保遺跡では堅穴住居が30軒検出されており、そのなかには石壇をともなった事例も存在し、有孔罍付土器や土偶などの遺物が出土している(朝日村教育委員会編2003)。

片丘丘陵上に位置する祖原遺跡では中期初頭から中期末までの堅穴住居が147軒検出されており、住居の配列は中央の広場を取り囲むように環状をなしている(塩尻市教育委員会編1986)。北原遺跡では中期の堅穴住居が4軒検出され、また石鎌、ピエス・エスキュー、打製石斧、凹石など多くの遺物が出土していることから、縄文時代中期の遺物散布地とされている(塩尻市教育委員会編1999)。松本平の南端に位置する平出遺跡は縄文時代から古代まで続く大集落であり、中期の堅穴住居が88軒検出されている(平出遺跡調査会編1955、塩尻市教育委員会編1981・1982・1983・1986・1987・2004・2006・2009・2010)。坪ノ内遺跡では中期の堅穴住居が6軒検出されており、復元可能な土器や土製品が大量に出土した。また土偶は中期のものが43点出土しており、松本市内では最も多い(松本市教育委員会編1990)。美ヶ原高原の山麓にあり、南流する女鳥羽川によって形成された扇状地の東端と、薄川扇状地の北端が接する部分に立地する大村塚田遺跡は中期後葉を中心とした大規模な遺跡で、釣手土器、有孔罍付土器、土偶、ミニチュア土器、土鈴などが出土しており、堅穴住居も46軒検出されている。また、住居内に祭壇をもつものが3軒ある(松本市教育委員会編1992)。松本平の南東部筑摩山地西麓の緩斜面上に立地する一ツ家遺跡では堅穴住居が49軒検出され、石刀、釣手土器、有孔罍付土器、土鈴などが出土していることから大規模な集落址の存在が窺える(松本市教育委員会編1997)。

後 期

縄文時代後期には中期と比べて集落が急激に減少し、それらは山麓や台地から低地へ移る傾向にある。この時代の主な遺跡としては安曇野市北村遺跡・離山遺跡、松本市井刈遺跡・林山腰遺跡などがある。

北村遺跡では石棒、土偶、骨製かんざし、ヒスイ製玉、石剣などが出土している。また墓塚が469基検出され、そのうち300基に人骨が認められており、内陸部における重要な資料となっている(長野県埋蔵文化財センター編1993)。烏川扇状地の扇頂部に所在する離山遺跡では環状列石状の集積ユニットが出土し、焼土、木炭、骨片、石棒、土偶などが大量に出土している(穂高町教育委員会編1972)。井刈遺跡では配石群が検出され、石器、土偶、木炭、焼小骨片などが出土している(大塚・永峯・原1963)。林山腰遺跡ではこの時期における特徴的な住居である柄鏡形敷石住居が1軒検出され、土偶、ミニチュア土器、深鉢、注口土器、凹石、磨製石斧、石皿、石棒などが出土していることから、精神生活に関わる遺物が非常に目立つ遺跡である(松本市教育委員会編1988)。

晩 期

縄文時代晩期の遺跡数はさらに減少しているが、大町市一律遺跡、松本市エリ穴遺跡・女鳥羽川遺跡、塩尻市福沢遺跡などの集落遺跡が営まれた。遺跡は主に河岸段丘や扇状地上に見られる。またこの時代の堅穴住居は弥生時代の集落遺跡と重複するケースが多い。

松本盆地の北端・木崎湖の東岸にある一律遺跡では中期の淀の内遺跡と同様に砥石、玉、ヒスイの原石、ヒスイの剥片などが出土していることから、ヒスイの加工場と推察されている(大町市教育委員会編1990)。エリ穴遺跡では耳飾りが不完全なものを含めて約2600点出土しており、出土量が国内最多であることから重要視されている(松本市教育委員会編1997)。松本市街の東方を南に向けて流れる女鳥羽川の中流川床中に発見された女鳥羽川遺跡では土偶、甕、深鉢、皿、朱彩小型土器片などが出土している。また、多量に出土した土器片により複雑な文化相の一端が明らかにされた(松本市教育委員会編1972)。田川の支流、鋳物師屋川によって開折された谷あいに向き緩斜面上に位置する福沢遺跡では半身立像の土偶が出土している。これは弥生時代中期になって出現する扇状に開いた頭部を持つ半身立像に続いていくと考えられている(塩尻市教育委員会編1985)。

(3) 弥生時代

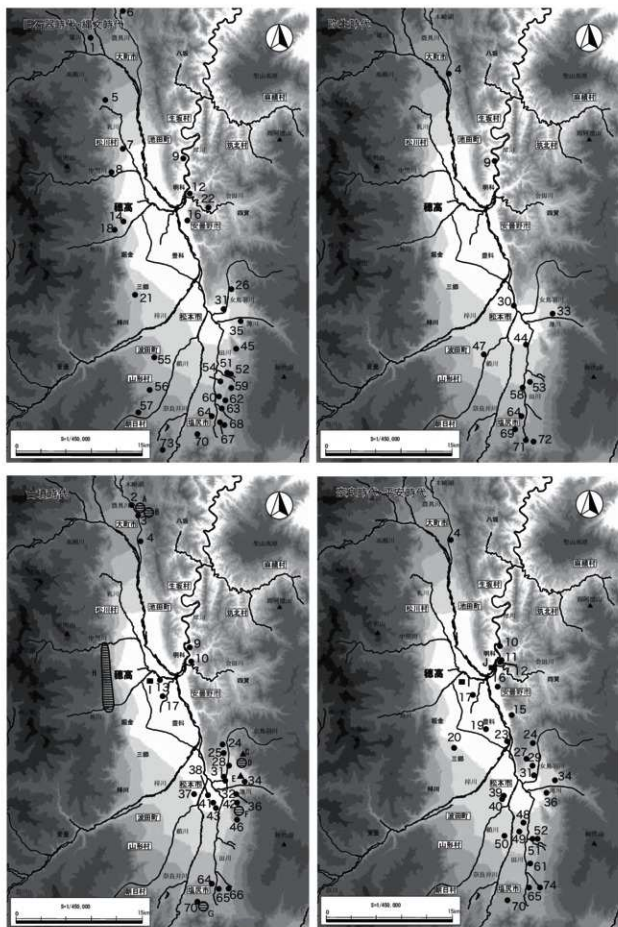
前 期

弥生時代前期の集落遺跡は奈良井川の一支流である田川の河岸や扇状地などに形成され、その代表的な遺跡と

第1表 松本平主要遺跡の消長

地域名	No	遺跡	旧石器	縄文	弥生	古墳			奈良	平安
						前期	中期	後期		
大町市	1	上屋		●						●
	2	豊吉				●				●
	3	豊見原			●	●		●		●
	4	中城原		●		●				●
	5	山ノ神		●						
	6	一律		●						●
	7	春明神社		●						
松田村	8	南の原A地点		●						
	9	ほうろく屋敷		●	●		●	●		●
安曇野市	10	上生野				●				
	11	瀬神明宮前								●
	12	坂田若宮	●							●
	13	藤塚						●		●
	14	他谷	●							
	15	上ノ山・葛蒲平宮跡群							●	●
	16	北村	●		●				●	●
	17	鳥塚街道					●		●	●
	18	藤山	●					●		●
	19	古野町筋								●
	20	三角原								●
	21	東小倉	●							
	22	井母	●							●
	23	平瀬				●				●
	24	岡田西裏	●				●		●	●
	25	下出口					●			●
	26	大村塚田	●		●					
	27	大村						●	●	●
	28	大村古屋敷			●		●			●
	29	大塚原						●	●	●
	30	宮淵本村				●		●		
31	女島羽川	●								
32	根野			●		●		●	●	
33	針塚	●		●				●	●	
34	下屋						●	●	●	
35	林山腰	●						●	●	
36	千籠頭北				●			●	●	
37	三の宮						●	●	●	
38	高宮						●	●	●	
39	北栗						●	●	●	
40	南栗						●	●	●	
41	出川西						●			
42	牛妻	●				●				
43	出川南			●		●		●	●	
44	百瀬					●			●	
45	坪ノ内	●								
46	尚畑	●			●	●				
47	境窪	●		●					●	
48	平田本郷								●	
49	小屋							●	●	
50	吉田川西							●	●	
51	小池	●							●	
52	エフ家	●			●				●	
53	エフ穴								●	
54	石行					●			●	
55	三夜塚	●							●	
56	梁の内	●							●	
山形村	57	機入保								●
	58	丘中学校	●		●					●
朝日村	59	矢口	●							●
	60	菊屋敷		●						●
	61	下塚沢						●		●
	62	女夫山ノ神		●						●
	63	根塚		●						●
	64	和手	●		●			●	●	●
	65	中換				●		●	●	●
	66	竜神平		●			●			
	67	尚陽台	●							
	68	福沢	●		●					●
	69	榮宮			●					
	70	平出	●			●		●	●	●
	71	田川瀬			●					●
	72	朝ノ宮			●					
	73	北原								
	74	葛蒲平宮跡群							●	

古墳・神社・寺院：A 来見原古墳群 B あま池古墳群 C 桜ヶ丘古墳群 D 妙義山古墳群 E 針塚古墳
 F 中山古墳群 G 平出古墳群 H 穂高古墳群 I 穂高神社 J 明利庵寺



第6図 松本平の主要遺跡（遺跡番号・記号は前頁参照）

して安曇野市はうろく屋敷遺跡、松本市針塚遺跡・境窪遺跡・石行遺跡が挙げられる。

犀川左岸河岸段丘上の北向きの緩やかな斜面上に広がるうろく屋敷遺跡では再葬墓が16基検出されているが、堅穴住居などの生活痕の検出はない(明科町教育委員会編1991・2001)。東山山麓と薄川扇状地に立地する針塚遺跡でも再葬墓が検出されている(松本市教育委員会編1993)。鎮川周辺の沖積堆積層上に位置する境窪遺跡では縄文時代的な円形住居と弥生時代的な方形住居が混在して見つかっており、また方形周溝墓以前の樺木棺墓や土器棺墓もみられ、前者からは人骨片が出土している(松本市教育委員会編1998)。赤木山丘陵の中央やや北寄り西斜面に位置する石行遺跡では九州や西日本などでよく見られる石剣の先端も出土している(松本市教育委員会編1987)。

中期

弥生時代中期に入ると集落は大規模化し、同じ場所で長期間継続する傾向が見られるようになる。中期の代表的な遺跡として、大町市中城原遺跡、松本市百瀬遺跡・宮瀨木村遺跡が挙げられる。

高瀬川によって形成された館の内段丘上の段丘崖東側に広がる中城原遺跡では中期の堅穴住居1軒、集落の環濠もしくは集落を区切る溝、後期の方形ないしは円形周溝墓7基、木棺墓3基が検出されていることから、弥生時代にはこの地域が墓域であったとみられている(大町市教育委員会編1992)。百瀬遺跡は、土器の種類も壺、甕、鉢、無頸壺、高杯のセットが揃っていることから、中期の遺跡の典型例とされている(松本市教育委員会編2001)。宮瀨木村遺跡では堅穴住居144軒と土壙墓が検出されており、土壙墓からは同時に人骨が出土している(松本市教育委員会編1986・1987・1989)。

後期

弥生時代後期には松本平全体を通してみると塩尻市で遺跡数が増加し、塩尻市柴宮遺跡・丘中学校遺跡・剣ノ宮遺跡・田川端遺跡・和手遺跡などの集落が営まれた。

田川左岸にある沖積地帯の扇状地上に立地する柴宮遺跡ではほぼ完形の銅鐃が出土している(大場・原1961)。水田地帯の中に南より延びる台地に位置している丘中学校遺跡ではガラス玉と鉄剣を埋納した方形周溝墓が検出されている(塩尻市教育委員会編1983・1992)。尾根状台地の西端近くに展開している剣ノ宮遺跡では非常に規則正しく並んだ方形周溝墓が検出されている。そのすぐ西側に田川端遺跡という後期の集落が展開しており、そこからはガラス玉の装身具が226点出土し、遺骸を埋葬したと思われる部分から鉄剣や腕輪が出土している。また剣ノ宮遺跡と田川端遺跡においては両遺跡を合わせて一つの巨大な集落であったと考えられている(塩尻市教育委員会編1987)。田川左岸段丘上に展開する高出遺跡群に属する和手遺跡では堅穴住居や方形周溝墓が検出されている。住居群と方形周溝墓がセットで検出されるのは田川流域に展開していた集落の大きな特徴である(塩尻市教育委員会編1988)。

(4) 古墳時代

松本平では古墳時代前期に大規模な集落が展開した松本地域を中心に大町地域・安曇野地域・塩尻地域にも集落が展開し、付近の山麓に古墳が造営された。中期や後期にも盛んに古墳が造営されたが松本平における中期から後期にかけての集落遺跡は少なく、主に有力な集落の近くに多くの古墳が造営された。また小規模な集落は古墳時代末期から平安時代にかけて大規模化していく。

大町市

大町市では借馬遺跡・米見原遺跡・中城原遺跡などの集落遺跡が営まれた。これらの遺跡群はいずれも複合遺跡である。このうち借馬遺跡は複合集落遺跡で、鹿島川扇状地扇端に立地している。その東の山麓や中腹には中期から後期に属する古墳が造営されている。主な住居は弥生時代には東山山麓の段丘上に分布していたが、古墳時代以降には段丘下の農具川流域まで分布が広がっていった(大町市教育委員会編1979・1980・1981・1985)。米見原遺跡は大規模な集落遺跡で、大町市の東部山地の山麓で居谷里湿原から流出する沢によって押し出された扇状地の中腹に立地し、中期の堅穴住居1軒と集石、列石、土器集中地点が検出された。この集石からは多数の土師器が古式須恵器と共に出土しており、祭祀的な性格を有する遺構とされている。またこの遺跡の東には中期か

ら後期にかけて造営された来見原古墳群が存在する。来見原古墳群では7基の円墳が確認されており、1号古墳から刀子、3号古墳から直刀が出土しており、時期的に中期から後期初頭に造営されたものとされている。また居谷里沢左岸扇状地扇端の段丘上端、来見原遺跡範囲の中央やや南には大笹古墳が存在し、ここからは中期のものと考えられている剣が1本出土している。その大笹古墳の東側、山際のテラス地形上に小規模なあま池古墳群が存在する。1号墳から4号墳までの円墳4基が確認されているが、4基とも石室を持たず、木棺直葬と考えられている(大町市教育委員会編1988)。中城原遺跡は社館ノ内集落北部の段丘上に広がる弥生時代中期から中世にかけて営まれた遺跡である。この遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての厨溝墓9基、木棺墓5基、中期末から後期前半にかけての古墳4基と土坑墓4基が検出されており、弥生時代後期から古墳時代にかけての墓域であったとみられている。中期の竪穴住居16軒と集石も検出されており、少なからず集落が展開していたと考えられている(大町市教育委員会編1992)。また、大町市に南接する池田町には7世紀前半の鬼の釜古墳があり、自然石の乱積みによる無袖式の横穴式石室が確認されている(池田町教育委員会編1977)。

安曇野市

安曇野市では集落遺跡に明科地域の上生野遺跡・潮神明宮前遺跡、穂高地域の馬場街道遺跡・藤塚遺跡などがある。上生野遺跡と馬場街道遺跡は前期の集落遺跡であり、このうち犀川の右岸に位置する上生野遺跡からは2軒の竪穴住居と古墳が確認されている。しかし明科地域ではこの遺跡の他に上生野遺跡と同じ4世紀前半に遡る古墳は発見されていない(明科町教育委員会編1995)。馬場街道遺跡は中世まで営まれた複合遺跡で烏川扇状地扇端部に立地し、前期の竪穴住居2軒、中期の竪穴住居2軒、後期の竪穴住居3軒が確認されており、小規模ではあるが古墳時代を通して集落が営まれていたことがわかる。馬場街道遺跡より西の山麓には穂高古墳群のE・F・G古墳群が存在しており、さほど遠くないことからここに存在した集落も古墳造営集団の一つであったと考えられている(穂高町教育委員会編1987)。穂高古墳群のA・B・C群に対応する集落遺跡は未だ見つからないが、この地域は昔からよく付近の川が氾濫を起こしているので厚い堆積の下に存在する可能性はある。このほか後期の遺跡として潮神明宮前遺跡・藤塚遺跡がある。烏川によって形成された扇状地の扇端付近に位置する藤塚遺跡はとくに大規模で、竪穴住居30軒、掘立柱建物5軒が検出されている。また土師器、須恵器、鎌、石製紡錘車、金環が出土している(安曇野市教育委員会編2009)。潮神明宮前遺跡からは竪穴住居や後期の古墳が検出されており、8基あるうちの6基は円墳である。6号墳は未確認ではあるが大きさが20mに及ぶ方墳とされ、7号墳は未報告のため墳形は不明であり、8号墳からは玉類や刀中茎、須恵器が出土している(桐原2002、明科町教育委員会編1994・2005)。

松本市

松本市の集落遺跡は薄川、田川、奈良井川、女鳥羽川の周辺に分布する。薄川周辺の集落は中下流域の河岸段丘と扇状地に分布し、県町遺跡・下原遺跡・千鹿頭北遺跡などがある。県町遺跡は薄川右岸に位置し後期の竪穴住居が検出された。同じく薄川右岸に位置し、後期になって突然出現した大規模集落である下原遺跡からも後期の竪穴住居26軒と掘立柱建物12軒が検出された。左岸では千鹿頭北遺跡から前期の竪穴住居7軒、後期の竪穴住居40軒が検出されている。薄川兩岸縁辺部と山麓部に古墳が多く分布し、針塚古墳・御神符古墳・中山古墳群などがあり、千鹿頭北遺跡に住んだ人々がそれら古墳の造営集団であったとも考えられる(松本市教育委員会編1989)。針塚古墳は松本市里山辺に造営された積石塚古墳でその存在は古くから知られており、5世紀後半に築造されたものとされ、竪穴式石室を持ち、内行八花文鏡(船載鏡)や武器・馬具・須恵器が副葬されていた。針塚古墳から薄川を挟んで対岸の山麓部に所在する御神符古墳からは直刀と剣が出土しており、中期後半から後期初頭にかけて築造された古墳と考えられている(松本市教育委員会編1991)。中山丘陵にある中山古墳群は73基の古墳から成る古墳群で、その中には3世紀末に築造された県内最古の前方後円墳である弘法山古墳(48号墳)も含まれる。弘法山古墳からは鏡、ガラス小玉、鉄剣、鉄斧、鉄鎌、土師器などが出土している(弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編1978)。また弘法山古墳からやや運れて築造されたものに仁能田山古墳(36号墳)があり、こちらは4世紀前半に築造された径20mの円墳である。仁能田山古墳からは三角縁尚方鏡銘帯鏡、鉄鎌、土

師器が出土している(原・小松1972)。また35号墳も同じ4世紀の築造であり、径30mとやや大型の円墳である。この3基とも中山古墳群の中では最初期に築造されたものである。しかし多くは丘陵南側に位置する群集墳であり、近接する向畑古墳群などとともに6世紀前半から8世紀前半にかけて造営されたと推定される(桐原1962・1980、松本市教育委員会編2003・2004・2008)。

田川左岸には高宮遺跡・出川西遺跡・出川南遺跡がある。高宮遺跡は中期の短期間に営まれた遺跡で集落内祭祀の跡と思しき土器集中区が検出されている。遺跡全体からは正位に置かれた高杯、逆位に置かれたミニチュア土器、多量の玉類、石製模造品、鉄鏃や鉄剣、さらには勾玉や鏡などが見られた。また故意に脚部を欠いた高杯なども見つまっている。また祭祀遺構と時期を同じくする竪穴住居が3軒あり、墓らしい合口土器棺も検出された。この遺跡は近くの集落がある時期にこの一帯を祭域として使用した跡と考えられている(松本市教育委員会編1994)。この遺跡から南東に出川西遺跡が位置しており、同様に配石遺構や土器集中地点が存在していることから高宮遺跡から出川西遺跡にかけての一帯が中期において、祭祀に関わる特別な空間として認識されていた可能性がある(松本市教育委員会編1999)。出川西遺跡の南側に立地する出川南遺跡からは前期の竪穴住居5軒、後期の竪穴住居125軒が検出されており、後期には大規模集落として展開していたことがわかる(松本市教育委員会編2000)。生妻遺跡、向畑遺跡は田川右岸の洪水を受けない安定した場所に立地する。生妻遺跡からは中期の竪穴住居が検出されており、中期から後期になるとこの周辺の山中に生妻遺跡を取り囲むように古墳が造営された(松本市教育委員会編1991)。向畑遺跡からは前期の竪穴住居57軒、中期の竪穴住居2軒が検出されている(松本市教育委員会編1990)。

奈良井川周辺には三の宮遺跡・北栗遺跡・南栗遺跡がある。これらの遺跡はいずれも奈良井川の左岸に位置しており、遺構や遺物の密集する地域である新村島立条里遺構に含まれている。三の宮遺跡は新村島立条里遺構の中でも北東部に位置し、掘立柱建物を中心とした集落があったことが確認されている(松本市教育委員会編1988・1989・1990、長野県埋蔵文化財センター編1990)。北栗遺跡においては水源近くに少数ながら竪穴住居が確認されており(長野県埋蔵文化財センター編1990)、南栗遺跡でも7世紀後半になると開発が開始され、奈良時代に入ってから北栗遺跡と南栗遺跡は本格的に集落が展開していった(長野県埋蔵文化財センター編1990)。女鳥羽川周辺には大村古屋敷遺跡・岡田西裏遺跡・下出口遺跡・女鳥羽川遺跡などがある。大村古屋敷遺跡では中期の竪穴住居が17軒確認されている。下出口遺跡では住居の発見例はないが、中期の高杯が出土しており、また南に100m行ったところに所在する岡田西裏遺跡からは前期の竪穴住居が3軒確認されているほかに中期の竪穴住居が2軒検出されており、岡田西裏遺跡から下出口遺跡にかけての一帯に中期の集落が存在していたと考えられている(松本市教育委員会編2008)。岡田西裏遺跡からは前期の竪穴住居が3軒確認されており、また大村古屋敷遺跡からは中期の竪穴住居が17軒確認されている。また東方の山地の各尾根上には、桜ヶ丘・妙義山などの中期古墳が築かれており、この周辺に該期の拠点の、中核的な集落が営まれていた可能性がある。桜ヶ丘古墳は浅間温泉飯沼洞に所在する径30mの円墳で、金銅製天冠と玉類などの装身具類、刀、劍、鏃、甲冑などの武器・武具類が出土したことで有名である。天冠は普遍的な装身具とは考えられておらず、社会的地位を示すものであり、甲冑と同様に大和政権からの下賜品と見なされている(本郷村教育委員会編1966、松本市教育委員会編2003)。妙義山古墳群は1号から3号までの円墳から成り、そのうち2号墳からは金環、刀、刀子、鉄鏃、馬具類、玉類、須恵器などが出土している(本郷村教育委員会編1966)。

塩尻市

塩尻市では和手遺跡・中挾遺跡・竜神平遺跡・平出遺跡などの集落遺跡が営まれた。和手遺跡からは古墳時代から奈良時代にかけて28軒の竪穴住居が検出されている。また平安時代の竪穴住居は130軒も検出されており、古墳時代には小規模だったこの集落が平安時代には大規模な集落となったことがわかる(塩尻市教育委員会編1997)。

田川東側の田川扇状地に立地する中挾遺跡からは竪穴住居10軒が検出されている。同時に古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居が46軒検出されており、大規模な集落としてこの地域の拠点の集落を担っていたと推察さ

れる(塩尻市教育委員会編1991)。田川を挟んで西側の奈良井川扇状地に立地する竜神平遺跡からは竪穴住居2軒、土壇3基、集石土壇1基が検出され、そこから出土した高杯や埴などは供獻形態を示しており、手捏土器も多数出土して非日常的な色彩が感じられることから祭祀的な集落であったと考えられている(長野県埋蔵文化財センター編1988)。

同じく奈良井川扇状地に立地する平出遺跡は東西1km、南北300mから400mにわたる広さ15haを有する広大な集落遺跡で、竪穴住居70軒が検出された。住居の規模は全体的に大きく掘立柱建物も検出されている。また平出遺跡に近接する丘陵上には同時期に造営された円墳3基を有する平出古墳群が所在している。このうち2号墳から金環、直刀、短刀、刀子、鉄鎌、馬具、玉類、須恵器、土師器が出土している。時間的には6世紀中葉のものと考えられている。1号墳から鉄剣、刀子、鉄鎌、土師器が出土しているが、3号墳からは鉄剣が出土したのみである。

(5) 古代

古代の松本平では古墳時代後期に展開した集落が奈良時代を通して平安時代に大規模化していったものが多く、また僅かではあるが弥生時代や古墳時代前期から続く集落も散見される。古墳時代後期に新しく展開して平安時代まで続いた集落は主に安曇野地域と松本地域に集中し、それに対して平安時代になって新しく展開した集落は塩尻地域に集中する。全体を通して見てみると平安時代は古墳時代と比べて倍以上の集落が展開した。

大町市

大町地域の主な集落遺跡には米見原遺跡と中城原遺跡がある。中城原遺跡からは平安時代の竪穴住居7軒が検出されている。米見原遺跡では奈良時代の竪穴住居1軒と平安時代の竪穴住居11軒が検出されており、その半数は焼失住居と考えられている(大町市教育委員会編1988)。中城原遺跡は弥生時代から古墳時代後期まで墓域的性格を有する遺跡として長く続いたが、奈良時代には墓域として使われた形跡が無い。変わって平安時代に人が住み着いて集落を形成したが墓の検出はない(大町市教育委員会編1992)。

安曇野市

安曇野地域では上生野遺跡・潮神明宮前遺跡・北村遺跡・馬場街道遺跡・吉野町館跡遺跡・三角原遺跡などの集落が営まれた。上生野周辺は古代にあっては更級郡麻績郷のうち日置里に属し、国衙領であり複合の郷村として存続した(明科町教育委員会編1995)。その地域に位置する上生野遺跡からは平安時代の竪穴住居が4軒検出されているほか、土壇も2基が検出されている(明科町教育委員会編1995)。潮神明宮前遺跡からは平安時代の竪穴住居が1軒検出された事に加えて土壇が1基検出されている(明科町教育委員会編2005)。北村遺跡からも竪穴住居や掘立柱建物、溝、井戸が検出されており、遺物は食器として使われた土器が多く出土している(長野県埋蔵文化センター編1993)。旧豊科町地域に所在する吉野町館跡遺跡は平安時代の竪穴住居が8軒検出されており、豊科地域の数少ない古代集落遺跡の一つである。出土土器から9世紀後半に位置づけられており、墨書土器や緑釉陶器の出土があるが、10世紀には姿を消しており非常に短期間に営まれた集落である(豊科町教育委員会編1992)。旧三郷村地域に所在する三角原遺跡からは平安時代の竪穴住居が50軒以上検出されている。住居には方形のものが多く、土師器が出土しており、遺跡は9世紀中頃に誕生して以降、約200年間にわたって生活の痕跡が見られ、長期的な集落と考えられている(三郷村教育委員会編2005、長野県埋蔵文化財センター編2005)。

旧明科地域では中川手県町に所在する明科廃寺が7世紀後半の創建と考えられており、これは長野県内でも最も古い寺院のひとつとして特筆される。発見当時は不明瞭な部分も多くあったが、平成11年に実施された調査の結果、掘立柱建物3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物1棟、掘立柱建物に伴う雨落ち溝などが検出され、多くの瓦類が出土し、中心伽藍こそ発見されなかったものの、藏などの瓦葺建物が検出されたことから、古代寺院址と断定された。付近には下押野地区に須恵器や土師器が出土し廃寺と同時期と考えられる上野遺跡、塩川原地区には廃寺の瓦類などを焼いた板坂古窯址などの廃寺との関連性が指摘されている遺跡が所在する。また明科廃寺には中心伽藍以外にも瓦葺の建物があることから相当な規模の古代寺院であったと考えられ、古墳時代から平安時代にかけて明科廃寺を建立した古代の有力氏族の根拠地であったであろうことや、相当有力な氏族が古代の安曇

野を支配していたことを覗かせる(明科町教育委員会編2000)。

またこれ以前に徳高に徳高神社が鎮座している。徳高神社は古墳時代にはその周辺に多くの集落が継続的に営まれていたことが分かっており、古墳時代後期に営まれた藤塚遺跡や前述の馬場街道遺跡などからその一端が発掘されている。「三代実録」の記述によると貞観元(859)年2月、宝宅神として従五位上に昇進され、また「延喜式」においては「名神大」として朝廷から奉幣を受けた大社とされ、安曇氏の祖先として仰がれる徳高見命を奉祀する、土地に根ざした氏神型の神社である(徳高町教育委員会編2001)。ただし安曇族がもともと奉じていたのは海神であったとされており、徳高神社には綿積神命も祀られている。この徳高見命が祭神となったのは綿積神命を祭神とする祭神観が代を経るごとに新たな方向に進行し、その結果としていつの代にか信仰の主体を第二の徳高見命にかけるに至ったからとされている(宮地1949)。

豊科地域では筑摩山地の一角に上ノ山窯跡群と葛蒲平窯跡群が所在する。上ノ山窯跡群からは竪穴住居25軒と須恵器窯跡17基が検出されており、葛蒲平窯跡群でも竪穴住居1軒と須恵器窯跡20基が検出されている。同時に粘土貯蔵穴や土師器、黒色土器の焼成坑も発見されており、1つの窯跡からこれら全てが検出されたことは長野県内に例がなく貴重な発見である。出土遺物から8世紀から9世紀代に位置づけられており、同時期に展開していた松本市の岡田西裏遺跡やその周辺の遺跡からも廃棄されたと考えられる須恵器不良製品が多量に出土することや貯えられた粘土や土師器焼成坑が発見されることから、そこに窯跡群と関係した集落が広がっていたとされ、松本市岡田から豊科地域にかけて、大規模な土器づくりの集落が展開していたと考えられている。(豊科町郷土博物館編1999)。

松本市

松本地域の集落遺跡は他地域よりも多く、時期的に見ていくと古墳時代後期から継続して営まれた遺跡に大村遺跡・大輪原遺跡・女鳥羽川遺跡・下原遺跡・千鹿頭北遺跡があり、奈良時代から継続して営まれた集落に岡田西裏遺跡・平田本郷遺跡が、平安時代に出現した集落に平瀬遺跡と下出口遺跡がある。また弥生時代から平安時代までの長期間にわたって営まれた集落に山川南遺跡がある。大村遺跡と大輪原遺跡は数多くの住居が検出されているのに加えて前者からは古瓦が多く出土しており、集落の東側にある妙義山麓の大村新切古窯址から瓦が出土することからも集落と古窯が深い関係にあったと考えられている(松本市教育委員会編2000・2005)。このことは同時に大村庵寺の存在を示唆したが、これまでの発掘調査において寺院に関する遺構は確認されていない。松本市東部の里山辺地区にある下原遺跡はその周辺地が信濃国府推定地の一つであり、比較的大型な竪穴住居と11棟もの掘立柱建物が発見され、8世紀と11世紀の2時期を核に集落が営まれていたと考えられている(松本市教育委員会編1993)。下原遺跡は7世紀後半に突然出現する比較的規模の大きな集落であるが、『日本書紀』天武天皇14(685)年10月の条に「壬午。遣輕部朝臣足瀨。高田首新家。荒田尾連麻呂於信濃。令造行宮蓋擬奈東間温湯殿」とあり、行宮が造られたことを示唆する記述がみられる。東間温湯は下原遺跡近隣の松本市浅間温泉もしくは湯の原温泉と考えられており、下原遺跡との関連性が注目されている(松本市教育委員会編1993)。南流する女鳥羽川により形成された南に広がる扇状地の西端近くにある岡田西裏遺跡では奈良時代末から平安時代前期にかけて土師器製作集団が営んだ集落址が確認されており、竪穴住居67軒が検出されたほか工房と考えられる住居の周囲に土師器焼成坑が約60基見つまっている(松本市教育委員会編2006)。松本市南部の奈良井川と田川に挟まれた河岸段丘上に立地する平田本郷遺跡からは奈良時代から平安時代前期の集落が発見されており、「美濃国」刻印のある美濃須賀産須恵器、瓦塔、鉄鉢を含む多量の鉄製品や鉄滓などが出土し、鍛冶関連遺物および多量の鉄器が発見されており、平田本郷遺跡での鍛冶関連行為が推定されている。また奈良時代には竪穴住居94軒、掘立柱建物6棟が発見されており、平安時代後期には100軒もの竪穴住居が発見されており、平安時代の集落としてはかなり大規模なものである(松本市教育委員会編2003)。平瀬遺跡からは平安時代の竪穴住居が多数検出され、竪穴住居覆土中から土師器、黒色土器、灰釉陶器の杯、椀といった食膳具を中心に多量に出土している。神奈川県の鎌倉文庫所蔵文書に、養和2(1182)年に源延という僧が平瀬法住寺において「簡素要略」を書写したという記録があることから該期の平瀬に法住寺という寺院が存在していたことがわかっており、調査も行われたが基礎

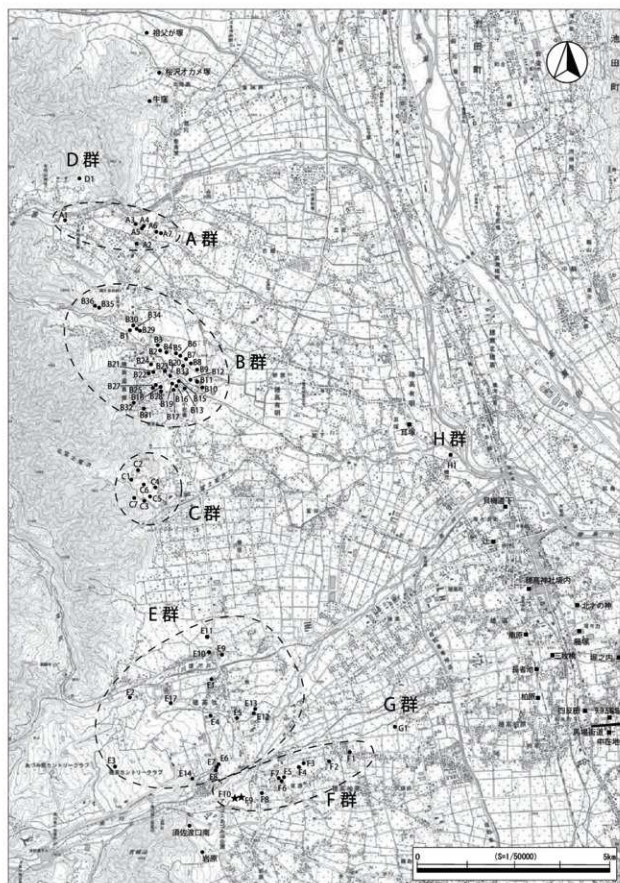
などの寺院に直接関連する遺構は検出されていない。しかし三尊仏像の彫刻された石製碗の出土や多くの布目瓦の破片が出土しているという点などからそう遠くない場所に法住寺が存在し、平瀬の集落はその寺院の周りに展開する集落であったと考えられている(松本市教育委員会編2000)。下出口遺跡からは平安時代の竪穴住居6軒、掘立柱建物2棟が検出されており、竪穴住居内には粘土貯蔵と土師器焼成坑が存在することから土器生産集落であったと考えられている(松本市教育委員会編2008)。長期間にわたって営まれた出川南遺跡からは古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居96軒が検出されている(松本市教育委員会編2000)。

他方、牧を語る上でもこの地域は外せない。平安時代中期に編纂された「延喜式」には、信濃十六牧と言われる牧についての記述があり、筑摩郡には埴原牧・大野牧、安曇郡には猪鹿牧の記載がある。埴原牧に比定されている松本市大字中山埴原には推定信濃諸牧監跡があり、当時の牧監跡のものとされる礎石が検出されていることから、埴原牧に牧監跡が置かれていたと考えられているが、その範囲や遺構には不明瞭な点も多い(松本市教育委員会編1993)。これらの牧を管理していたと考えられている集落に松本市小原遺跡・小池遺跡・一ツ家遺跡、塩尻市吉田川西遺跡などがある。小原遺跡では竪穴住居128軒、掘立柱建物9棟が検出されている。特記すべき遺物に墨書土器があり「又」や「餘」などの文字が確認されているが、これらの墨書土器には小原集落内では最古の住居から検出されたものもあるため、集落の開発が始められた初期から識字層の存在が認められる(松本市教育委員会編1990)。小池遺跡もまた奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居187軒、掘立柱建物11棟が確認されており、古代における大集落であったとされる。小池遺跡・一ツ家遺跡は8世紀初頭に集落の形成がはじまり、8世紀末から9世紀初頭に長野県内最大級の掘立柱建物が出現し、多量の緑軸陶器が出土することなどから急速に隆盛を極めたことが窺える。小池遺跡・一ツ家遺跡を含む周辺一帯は古代には信濃國筑摩郡良田郷に含まれ、郷内には古代官道の東山道が通っており、埴原牧の推定地に接近することからも小池遺跡・一ツ家遺跡は埴原牧の管理集落であったと推定されている。小池遺跡はその後10世紀には衰退してしまい、南西に500ほど離れた吉田川西遺跡が発展を始める。このことから埴原牧の経営に関わっていた有力者が9世紀代には小池遺跡を中心に経営し、10世紀には吉田川西遺跡に経営の中心を移していったと考えられている(松本市教育委員会編1997)。

塩尻市

塩尻地域の古代集落遺跡には吉田川西遺跡・下境沢遺跡・和手遺跡・中挾遺跡・平出遺跡がある。前述の吉田川西遺跡からは「棟原(はいばら)」や「蘇」と書かれた墨書土器が出土しており、「棟原」という文字が記述されている事から埴原牧の管理集落であったと考えられている。また、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居266軒、掘立柱建物8棟が確認されており、松本市の小原遺跡と並んで古代の大規模集落であった(塩尻市教育委員会編1986、長野県埋蔵文化財センター編1989)。またその中には奈良時代の竪穴住居4軒が確認されており、これと同時に密室を有する遺跡に葛蒲沢密跡群がある。塩尻市の東方、南北に延びる片丘丘陵上に立地する葛蒲沢密跡群は密室1基、竪穴住居1軒、墓壇1基が検出されており、須恵器杯、杯蓋、甕、壺、長頸壺、短頸壺、鳥形碗、円面碗、瓦塔片といった遺物が出土している。密室は、出土した須恵器から8世紀後半に構築され、極めて短期間に廃絶したものと考えられている(塩尻市教育委員会編1991)。田川に向かって傾斜する片丘丘陵上にある下境沢遺跡からは9世紀後半から10世紀前半の竪穴住居33軒が検出されており、短期間ではあるが大きな集落の存在が予想される(塩尻市教育委員会編1998)。また緑軸陶器や多数の墨書土器の出土に加え、カマド形土器や緑軸製皿などの特殊な遺物も出土している。和手遺跡からは奈良時代の竪穴住居1軒と平安時代の竪穴住居84軒が検出されており、土師器、須恵器、灰軸陶器・緑軸陶器、青磁、白磁火焚斗、鉄器、紡錘車といった遺物が出土している(塩尻市教育委員会編1997)。中挾遺跡からは平安時代の竪穴住居38軒が検出されており、下境沢遺跡と同じく当時の拠点集落であったことが推察され、米倉と思しき掘立柱建物も10棟検出されている(塩尻市教育委員会編2000)。平出遺跡は古墳時代前期から継続して営まれた長期的な集落で、2005年から2008年にかけての調査でも平安時代の竪穴住居20軒が検出されており、墨書土器の出土した住居も見られる。その中でも140号住居は墨書土器の出土が6点と最も多く、この集落の核的住居であったと考えられている(塩尻市教育委員会編2009)。

(西野・牧野)



第7図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡

安曇野市教育委員会 2010 をもとに作成。A2-A4-A5 の位置は藤澤 1968 による。B14・B26・E15-E16-E18-E19 の位置は不詳。なお、高瀬川を挟んだ対岸の池田町にも数基の円墳が存在するが、本図には示していない。

第3節 穂高古墳群の概要

本学では、穂高古墳群を以下のように定義・分類づけている(國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

1. 「穂高古墳群」は『信濃史料』(信濃史料刊行会編1956)において分類されたA群～D群、『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』(長野県教育委員会編1969)において分類されたE群～G群、『穂高町の古墳』(穂高町教育委員会編1970)において分類されたH群、『長野県史』(河西・松尾1984)において旧穂高町地域に分布する古墳群を構成する一部とされた松川村所在古墳によって構成される。
2. 従来古墳群全体を示す名称として多く用いられてきた「有明古墳群」という語については、A群～D群までを指す場合と旧穂高町の古墳全体を示す場合の2通りの意味をもち、なおかつ松川村所在古墳を含める場合と含まない場合があることから、これを用いず「穂高古墳群」の名称に統一する。
3. 単独墳については現在までの研究史上の習慣上G1号墳(上原古墳)のように未知の古墳が周辺に存在している(していた)可能性(穂高町教育委員会編2001)を考慮して古墳1基のみで構成されていても「群」とする。
4. A群～G群は穂高古墳群を構成するそれぞれ独立した支群とし、古墳群全体を示す「穂高古墳群」と各支群との中間で習慣上・便宜上用いられてきた「有明古墳群」「西穂高(牧・塚原)古墳群」などの名称は用いない。
5. 各支群を構成する古墳の総数は『信濃史料』(信濃史料刊行会編1956)以降「所属支群を示すアルファベット+通し番号」の表し方で文献上に確認できたものを総数として報告した。また穂高古墳群全体を構成する古墳の総数は各支群の総数の合計に加え、「所属支群を示すアルファベット+通し番号」の表し方で文献上では確認できないが以前に文献上で存在が確認されているもの(例:狐塚第4・5号古墳)を考慮して「87基以上」とする。

以下、上述の諸文献や各報告書をもとに支群ごとに概要をまとめておく。

A群 油川沿いの宮城地区に分布するA群は、8基のうち4基が現存している。最も高い場所にA1号墳があり、800mから1100mほど下った場所に残り3基がある。1964年の穂高町教育委員会による番番調査では、本群中には8基が存在していたとして煙滅し去った4基を欠番としている。A1号墳は段塚ともいい、南方向に開口する羽子板形の横穴式石室を有する(第8図1)。墳丘、石室ともにほぼ完全な状態で残っており、石材は花崗岩のほか入口部付近の一部に割石を用いている。副葬品として直刀、馬具、土師器、須恵器(提瓶・壺・罎・杯)などが出土したといわれているが現存していない(桐原1991)。天井石は12石あり、そのうち入口部の一石を除いた11石が玄室のものとする(岩崎・松尾・松村1983)。穂高古墳群中最もよく保存されているものの一つである。A6号墳は大甕塚といい、墳丘は上部がなく周囲だけがわずかに残っている。石室は自然石で囲まれ北壁の全てと南壁の一部、奥壁が崩れかけたまま残っており、天井石は失われている。馬具(香袋2・雲珠1・轡・鏡・尾錠)、装身具(勾玉3・管玉9・切子玉4・ガラス子玉3・金環4)、武器(直刀・鉄鎌)、須恵器(横瓶・平瓶・蓋付杯・杯)、土師器など多数の出土があり(第9図1)、その一部が有明山神社社宝となっている(岩崎ほか1983)。A7号墳は景塚と呼ばれA群最東端に位置し、墳丘は周囲が残存するのみで天井石は失われている。石室は奥壁のみほぼ完全に保存され、東西の側壁は下部だけが残っている(穂高町教育委員会編1970)。

B群 四ヶ塚、小岩岳地区に位置するB群は富士尾山東麓の天満沢川兩岸に分布する36基からなる。B1号墳はちいが塚といい、長径36m、短径30mとB群の中で最大の規模である。墳丘は半ば崩れており天井石は石室内に落ち込んでいる石を含めて6石とみられ、東南に開口する横穴式石室を有する(第8図2)。入口右側壁は長さ3m近い自然石を用い、奥壁と左壁は石材を5段にわたって横積みしている(岩崎ほか1983)。B3号墳は連塚といい、墳丘は径15m、高さ25mで墳丘は半壊の状態にある(桐原1991)。天井石は中央の2石が完全に保存され、その前後2石が石室内に落ち込んでいるが、石室はほぼ完全に保存されている(穂高町教育委員会編1970)。B5号墳は金甕塚といい、現在東壁のみが残る。『旧南安曇郡誌』には人骨3体、武器(直刀・鉄鎌)、装身具(勾玉2・管玉2・小玉・金環3)、馬具(轡3・尾錠)、須恵器(長頸瓶・壺瓶)の出土遺物(第9図2)が多数ありと記載されている(太田1923)。B13号墳は墳丘径が12mと規模は大きくないが墳丘と石室はほぼ完全に残っている。B23号

墳は塚といひ、墳丘は半壊状態にある。横穴式石室を有するものの、石室内部は土が入り詳細不明であり天井石は南端に1石が残るのみである。須恵器(壺・高杯・壺)・土師器(甕・杯)・装身具(勾玉・管玉・切子玉・金環5)・直刀・馬具・金鍍金の菱形留金具が出土したと伝えられており、その一部が有明山神社に残されている(桐原1991)。この他B群出土と伝わる遺物が有明山神社に残されており、の中には第1章で触れた鳳凰形銅葉も含まれる(第9図6)。

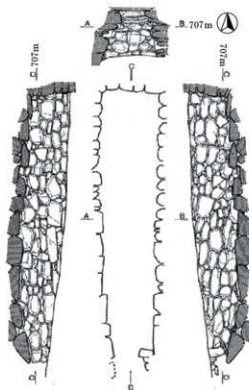
C群 富士尾地区に位置するC群は、山麓をやや入った富士尾沢兩岸に沿って分布している。「徳高町誌」では5基がC群に分類されているが、その後2基を加えて7基としている(安曇野市教育委員会編2010)。大型石室を持つ古墳は無く、いずれも径10m、高さ1m前後の中・小規模の円墳で、石室は横穴式である(岩崎ほか1983)。C1号墳の石室は長さ7.2m、高さ0.9m、幅は下方部で1.4mである(桐原1991)。

D群 中房川左岸に位置し、通称「魏石鬼窟(魏磯城窟・魏石岩窟とも表記される)」で知られる1基をさす。正面高3.6m、左右幅7.9mの巨石の下に石室があるため厳密には墳丘を持たない。石室規模は玄室長4.36m、奥壁幅2.7mで、床面下より馬具(飾金具・留金具破片)、鉄鏃、須恵器(甕・提瓶・高杯)などが出土しており(第9図3)、これらの遺物から7世紀後半と考えられている(桐原1991)。鳥居龍藏は1921年に踏査を行い、石壁を石材を横に積み重ね縦に並べていることや一枚の大きな石材を天井石に用いている独特な構造から「ドルメン式古墳」と指摘し、須恵器片1点を採集した(鳥居1925)。この発見によって翌年、宮坂光次が実測調査を行い、埴科郡倉科村(現千曲市倉科)にある古墳の石室と構造が類似することから魏石鬼窟は古墳であるとした。しかし所在地の地形からみて石室の天井石は自然石を用いたものであり3面の石壁は天井石を支えている石材ではないとして、ドルメンのようではあるが実際は盛土をした古墳が変形したものであるとしている(宮坂1922)。その後、「徳高町誌」の編纂に伴い1986年に長野県埋蔵文化財センターによる実測調査、三木弘による発掘調査が行われた。また、古墳時代以降の遺物として陶磁器・釘・古銭が出土していることから石室の二次的な使用を指摘し(三木・寺島・西山1987)、天井石正面に観音像が3体彫り込まれているほか石室内で火を焚いた形跡があることから魏石鬼窟を修験場として利用されたとしている(三木1990)。

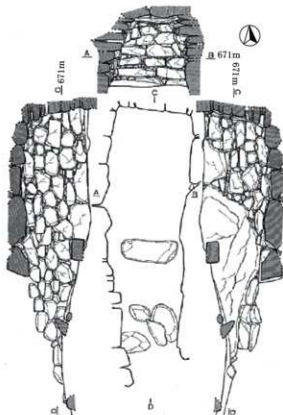
E群 烏川・川窪川に挟まれた台地の東縁にある牧地区に位置するE群は14基で構成され、扇状地一面に散在した形で分布している(安曇野市教育委員会編2010)。E1号墳は西牧塚といひ、墳丘は僅かに残っていて石室とみられる大石が一部露出しているが詳細は不明である。E2号墳は三郎塚と呼ばれ、径14m、高さ1.4mの墳丘中に長さ2m、幅1.3m、高さ1.2mの長方形の玄室が残り、土師器・須恵器が出土している。E3号墳は十三屋敷西古墳といひ、E群中最も高い地点に位置する。墳丘はわずかに残るのみで無袖式の石室が露出しており、現在は徳高カントリークラブ内に保存されている(桐原1991)。E6号墳は狐塚3号墳といひ、径20m、高さ3.6mでE群中最大規模である。1911年に発掘された古墳がこれに該当するとされ、武器(直刀・鐔・鉄鏃・槍身)、馬具(轡2)、装身具(勾玉・管玉・切子玉・白玉・金環・青銅製鋼1)、須恵器(壺・横瓶・平瓶・高杯・蓋)が出土し(第9図4)、現在は東京国立博物館・徳高神社・満願寺などに保管されている(太田1923)。E7号墳は狐塚2号墳といひ、1951年に大場磐雄の指導のもとに調査され、石室内部の玄室と羨道の区別は不明瞭だが長方形の箱形とみられている。墳丘は径15m、高さ2mで、長さ2.25m、幅2.1m、高さ1mの無袖式石室を有する。石列の前部から装身具(金環)、武器(鐔・鉄鏃)、後部から武器(直刀・刀子)が出土している。E10号墳は寺島塚といひ、E11号墳の東南にある。墳丘がわずかに残り、勾玉や直刀などが出土した。古墳の前には寺島仲間の祠があり、樺の太木が立っている(桐原1991)。

F群 塚原地区に位置するF群は、柏原沢の右岸、標高605mから650mの間に列在している。F群はほとんどが破壊されており詳細を知ることはできないが、10基のみ墳丘の規模が判明しており大小5基ずつ二つのグループに分けられる(桐原1991)。1975年にF1号墳(一本松古墳)で行なわれた発掘調査では、石室は無袖式で天井石は失われているものの側壁と奥壁に花崗岩が用いられていることが判明した(第8図4)。また、須恵器の高台付杯の破片が1点出土している(中島1976)。F8号墳は柏原沢の南を流れる旧矢原沢の凹地沿いに位置すると地元住民が伝えているが、現状では古墳の存在は認められない(桐原1991)。しかしその付近からは須恵器片が採集さ

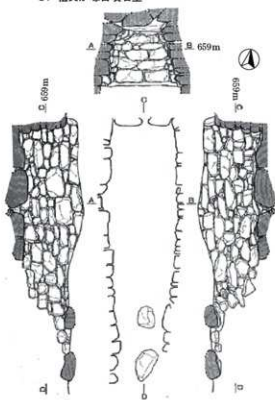
1. A 1号墳石室



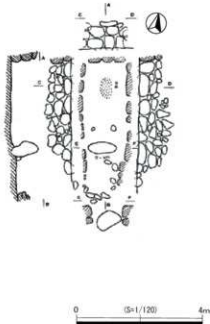
2. B 1号墳石室



3. 祖父が塚古墳石室

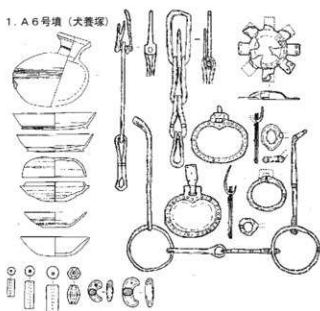


4. F 1号墳石室

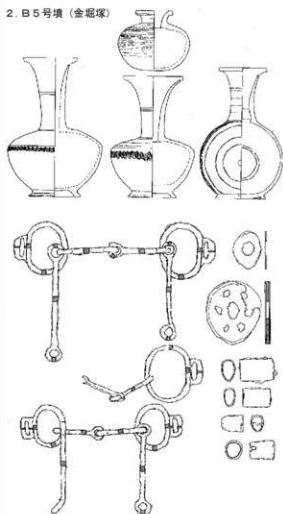


第8図 穂高古墳群の主要石室(1～3:岩崎・松尾・松村1983 4:中島1976)

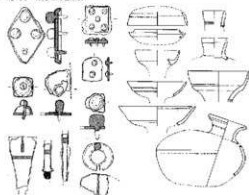
1. A6号墳 (犬養塚)



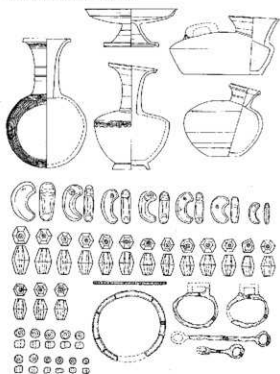
2. B5号墳 (金堀塚)



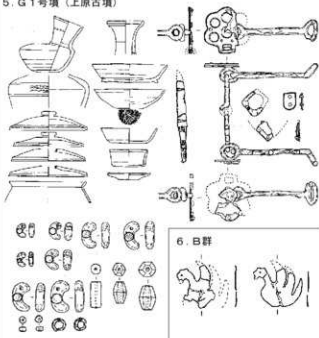
3. D1号墳 (鏡石鬼窟)



4. E6号墳 (狐塚3号墳)



5. G1号墳 (上原古墳)



須志器：S=1/8、玉類・冠飾：S=1/4 武器・馬具：S=1/6

第9図 穂高古墳群出土の主要遺物 (桐原 1991)

れ短刀の出土例があったとされている。F 9号墳とF 10号墳は二つ塚といひ、F 9号墳は墳丘上に巨石が散在し、諏訪社の古い祠があったが現在はなくなっている。F 10号墳の墳丘径はおおよそ13mで天井石6石と側壁での4段積みがはっきりとみられ、F群中でもっとも保存状態がよい(徳高町教育委員会編1970、國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

G群 F群の東側、上原地区の水田中にある上原古墳のみがG群に分類されているが、その付近に「塚田」の地名が残っていることや巨石が見つかることから今後の古墳の発見が期待されている。1930年に猿田文紀らによって調査されており、墳丘は既になく、花崗岩を用いた横穴式石室の奥壁付近の石組みと天井石の2石のみが残っていた(猿田1931・1933)。石室の規模は長さ10.1m、幅1.25mから1.4mであり、装身具(勾玉7・管玉1・切子玉2・小玉2・金環2)、馬具(轡1・杏葉1)、武器(直刀1・刀子1)が出土し(第9図5)、特に馬具については、杏葉が心葉形であることや轡が六花形鏡板付であることから6世紀後半までに作られたものと考えられている(榎原1991)。その後2001年に徳高町教育委員会によって発掘調査がなされ、古墳の構築方法を明らかにしたほか墳丘西側の集石内から須臾器(蓋1・杯1)が出土した(徳高町教育委員会編2001)。

H群 徳高川の西側、最低位段丘の先端に位置するH 1号墳を耳塚といひ、1基のみの構成である。塚上の祠を大塚様といひ昔から耳の神様として地域に知られており『旧郡誌』では魏石鬼八面大王にまつわる塚と伝えられている。『徳高町誌』の編纂に伴い墳丘の実測調査が行われ、円墳とみられているもの『新郡誌』では盛土ではあるが詳細は不明としている。しかし、洪水堆積土上に位置するにも関わらず墳丘高が2mを測ることから古墳でない可能性もある(安曇野市教育委員会教示)。

松川村所在古墳 安曇野市の北側、松川村に所在する祖父が塚古墳と牛窪古墳、桜沢オカメ塚の3基の単独墳からなる。祖父が塚古墳は1879年・1880年ごろに好事家によって発掘され(平林1988)、その後1983年12月に筑波大学によって墳丘と石室の実測調査が行われた。その結果、墳丘径16m、高さ2.53m、南方向に開口する横穴式石室を有することが判明し(岩崎ほか1983、第8図3)、副葬品として玉、鉾、刀、鏡、土師器の出土が伝えられているが現存しているものは宮内庁書陵部に保管されている玉・銀環・頸椎太刀の装具一式のみである(河西・松尾1984)。また、徳高町内に分布する古墳との石室構造の類似性が指摘され(岩崎ほか1983)、翌年の『長野県史』ではこれを踏まえて徳高古墳群を構成する古墳の一つとして扱っている(河西・松尾1984)。牛窪古墳とオカメ塚古墳については、1921年に当時の大町中学校校長であった春日賢一による報告が残っている。牛窪古墳は、春日賢一が報告した当時からすでに発掘されて墳丘も半壊状態にあったという(春日1921)。花崗岩の天井石1石と側壁がわずかに残るのみで封土も失われているため墳丘や石室の規模は判明せず副葬品の出土もみられない。オカメ塚は、祖父が塚古墳東側の水田地帯にあるといわれているが『松川村誌』編纂の際に行われた確認調査でも古墳が存在した跡はみられなかった。しかし前述の春日賢一の報告によれば、「周囲六間高三尺の圓墳である。」とあることから当時は直径3.5mほどの盛土があったと考えられるが詳細不明としている(平林1988)。

(参考) 旧堀金村所在古墳 徳高古墳群を構成する古墳として認定されていないが、その可能性のある古墳として旧堀金村内に須佐渡口古墳・岩原古墳・前の髪古墳・曲尾古墳群・古城下古墳が確認されている(安曇野市教育委員会編2010)。(岩井)

第四章 穂高古墳群 F 9 号墳の調査

第 1 節 調査の経過

(1) 調査地の概要

調査対象の F 9 号墳が属する穂高古墳群 F 群は、塚原地区烏川から分岐する柏原沢右岸に沿って分布している。F 9 号墳は西に隣接する F 10 号墳と共に二つ塚と呼ばれ、F 群の中でも最西端といえる烏川扇状地扇頂に位置し、国営アルプスあづみの公園内に所在する。地籍は長野県安曇野市穂高柏原3653である。両古墳は旧穂高町の塚原配水池と呼ばれた上水道の水源地となっていたが、1992年の公園建設に伴って水源地は移転し、現状保存されることになった。墳頂部にはかつて諏訪社の祠が存在しており、少なくとも1970年頃まで建っていたことが確認されている(穂高町教育委員会編1970)。

(2) 2010年度までの調査の成果

本学では F 9 号墳の調査を2009年度から行っている。

2009年度調査では、F 9 号墳・F 10 号墳の墳丘測量及び墳丘や石室の状況確認をした。その結果、F 9 号墳は直径17.0m、高さ1.32m、F 10 号墳は長軸12.9m、高さ1.8mの横穴式石室を持つ円墳と理解した(國學院大學考古学研究室編2010)。

翌2010年度調査では、比較的保存状態の良い F 10 号墳を現状のままにして、F 9 号墳を発掘調査することにした。F 9 号墳の墳丘上に1m×1mのグリッドを設定し、北から南へ1~10、東から西へA~Hの記号を割り振った(第9図)。そして、墳頂部で直角に交わるように墳丘の南側に向かって A 1~A 10を第 I トレンチ、西側に向かって A 1~H 1を第 II トレンチとして、発掘調査を行った。調査の結果、天井石は現存していなかったが、石室の範囲や羨道の位置を確認することを目的とした第 I トレンチの A 1~A 6グリッドから石室東壁と想定される2層に重なった石材を確認した。石室内部は割石や石室石材と思われる大きな石で埋められていた。また、A 8~A 10グリッドを中心に須恵器片や土師器片が、石室付近からは和釘や硬貨等の金属類、近代陶器片などが出土した。このうち、須恵器の長頸瓶は7世紀中葉のものであると考察している。一方、第 II トレンチは墳丘の堆積状況や墳裾部の状況を確認することを目的としたが、水源地開発に伴うものか大きく崩れた痕跡があった(國學院大學考古学研究室編2011)。このため、2009年度測量で得られた墳径は構築当初のものとは異なる可能性がある。

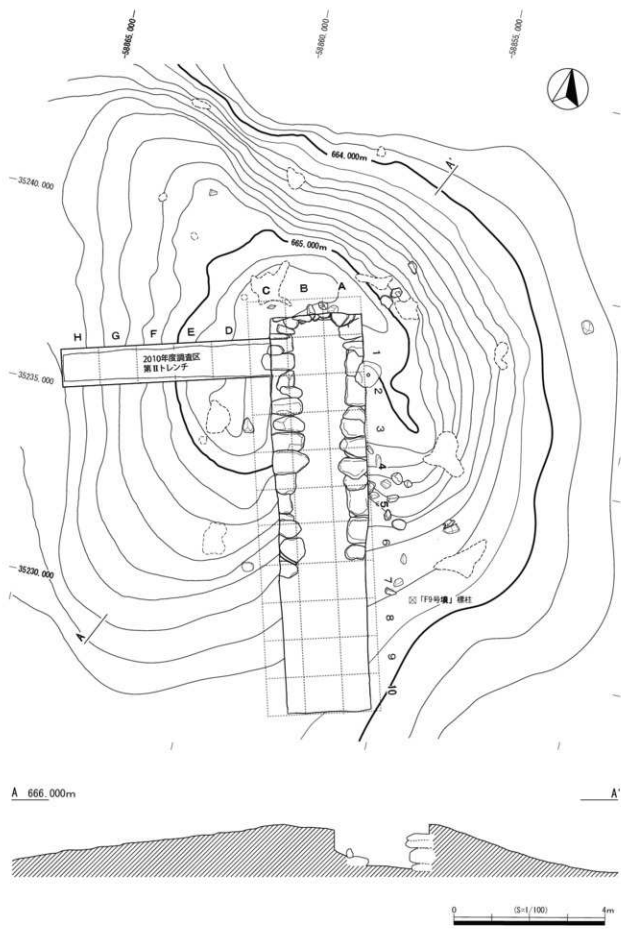
(3) 2011年度の調査の経過

今年度の調査では、石室の全体像を把握するために、第 I トレンチを拡張して掘り進むことにした。

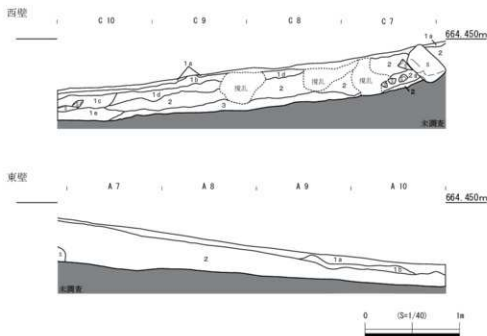
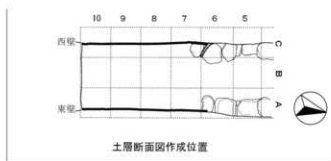
まず南西からの遠景と東からの墳丘全景の写真撮影をした。それから昨年度発掘した第 I トレンチ(以下 A 列)を復原して、光波測距儀でグリッドを再設定した。そしてトレンチの北側を0.5m、西側を1m拡張して B 列の掘り下げを始めた。出土した遺物は、出土状況が分かるものについては写真撮影の後に取り上げを行い、光波測距儀を用いて出土地点を測定した。また土器片などの細かい遺物を回収するため、掘削した土はグリッドごとに分けて篩いかけた。

B 列も A 列と同じ深度まで掘削を進めると、石室西壁の石材が露出し始めたものの、一部がトレンチ外にまで広がっていたため、さらに西側に0.5m拡張した(C列)。また北側の拡張部分からは石室奥壁を確認した。

壁面全体を検出した後、クレーンを用いてトレンチ内の大型礫を墳丘の脇に移動させてトレンチ全体を精査したが、床面の確認までには至っていない。精査が終わるとトレンチの全景、石室の全景・平面・側面、2グリッドごとの両壁を撮影した。7~10グリッドについては土層の堆積状況を確認し、縮尺1/10で土層断面図を作成した(第11図)。いずれも後世の擾乱土であり、古墳築造時のものではない。大きな石材の多い1~6グリッドは F 9 号墳の標柱頂部(標高666.784m)を基準点としてレベル高をチョークでマーキングした。これをもとに石室奥壁、東壁と西壁を2グリッドずつに区切って分担し、平面図及び壁面図を作成した(第12図)。なお、土層断面図はグリッドの軸に合わせて作成したが、石室実測図は主軸に合わせてグリッド軸より東に2.075'ずらして作成した。(嶋崎)



第10図 2010年度～2011年度調査区全体図



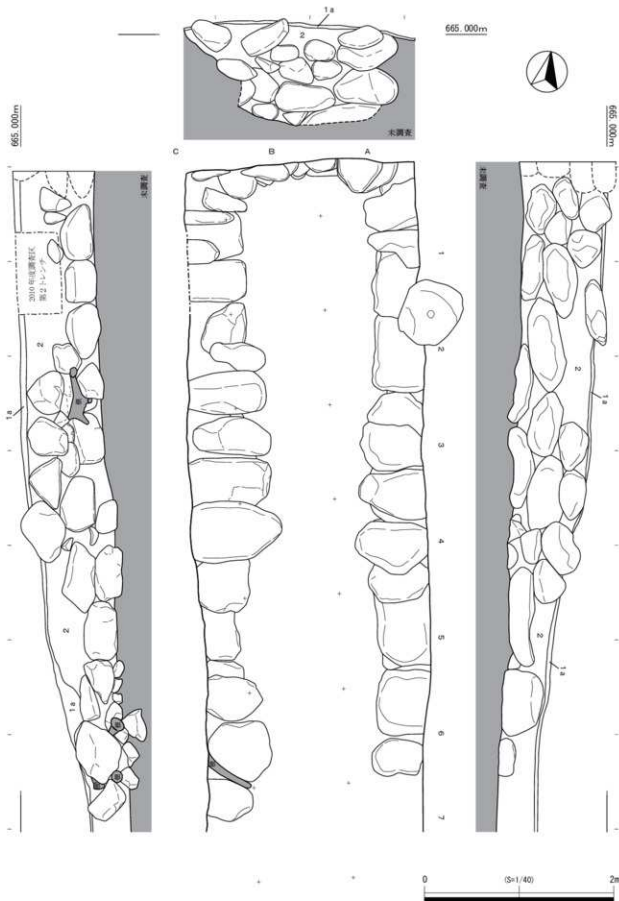
土層説明

- 1 a 層 黒色土 (S12/1) 調査区全面にみられる腐葉土層 (2010 年度調査 1 層に対応)
- 1 b 層 黒色土 (7. S1K2/1) 東: 風状に堆積する細かい粘土の炭化ブロッコ層
浅黄色土 (2. S1K7/3) 西: 黒褐色年度層を含む砂層
- 1 c 層 黒褐色土 (101K3/2) 風状に広がる炭化物を微量に含む層
- 1 d 層 褐色土 (101K3/2) 円礫を微量に含む層
- 1 e 層 暗オリーブ褐色土 (2. S1K3/3) 礫を少量含む層
- 2 層 褐色土 (101K3/2) 礫が多く含まれる後世の擾乱層 (2010 年度調査の 2 層に対応)
- 2 a 層 暗褐色土 (101W4/1) 砂利を多量に含む層
- 3 層 黒色土 (101K7/1) 礫を含む層

第11図 調査区南側土層断面図

第2節 石室

一昨年度の測量では、F 9号墳の主軸をN-14.5°-Wと報告したが、今回の調査によりN-12°-W (南の方向に開口)をとることが明らかになった。確認できる石室の規模は現状で、石室長約7.0m、石室幅約1.3m～約1.5m、石室高1.1mであることが明らかになった。これまでに東壁で3段、西壁で3段、奥壁で5段、溝道で1段の石積みを検出した。全体的には最上が丸みをもった石材の小口積み、以下は四角や横長の石材による平積みが多くみられる。持送りによって積まれているため、石積みが上段に行くほど石室幅が狭くなっていく。奥壁においては5段目まで検出しており、1段目～3段目の石材は東西の側壁より石材は小さく乱雑に積み、4段目から平均的な大きさの石材をしっかりと積んでいる。また、奥壁の東西壁との境は端が丸状を呈しており、石材は放射状に配置されている。石材は埋没しているものもあるため、正確な大きさは確認できないが、平均的に約0.5m×約0.6mから約0.6m×約1.0mとなっている。(関)



第 12 図 石室実測図

第3節 出土遺物

今年度の調査では杯・甕・壺をはじめとする数器種の須恵器片が多数出土したほか、少数の土師器片や切子玉1点が出土した。また近世陶器・釘・硬貨など近・現代に属する遺物も出土している。

(1) 古墳時代～古代の遺物

①須恵器

須恵器片は35点出土した。そのうち、器形の推定と実測が可能であった以下の10個体を報告する。

長頸甕(第13図1・図版10・4)

頸部の破片1点出土し、前年度出土した破片と接合した。頸部は中央がややくびれて2条の沈線がめぐらされ口縁部近くで外反しており、口縁部は折れ曲がって段差がある。ロクロによる成形後、内外両面にナデがされている。器体の焼成は良好で色調は灰色(5Y6/1)であり、胎土は細礫、黒色粒子、白色粒子が含まれる。推定口径9.4cm、くびれ部分径4.9cm、残存高10.5cm。A9グリッド2層、B10グリッド2層出土。

壺(第13図2・7・図版10・1・2)

口縁部1点と胴部1点出土した。第12図2の器形は下から上に向かい微妙に反りながら広がり、口縁部から約1cm下で内側に少し屈折している。外面はムラのある自然軸がかかり、口縁部から約1cm下に幅約2.3cm前後の波状文と連続する2条の沈線が刻まれている。ロクロによる成形の後にロクロナデ調整と施文がされているのが確認できる。色調は淡黄色(2.5Y8/3)で焼成は良好、細礫が少しと砂粒、黒色微粒子が胎土に含まれる。推定口径約10cm、残存高5.7cm、器壁の厚さは0.4cmでほぼ均一とみられる。B10グリッド2層出土。

胴部(第13図7)は中央が張った形とみられ、外面中央にクシ描と見られる斜線と平行線が重なるように施され、全体的に自然軸がかかっている。ロクロ成形後に外面を調整、施文をしたと読み取れ、内面には成形時の痕跡がはっきり残っている。良好に焼成された器体の色調は灰白色(5Y8/2)で、胎土には黒色微粒子と僅かな白色微粒子が含まれる。胴部推定径1.3cm、推定残存高6.8cm、器壁の厚さ0.7cm。A5グリッド2層、A9グリッド表土層、B6グリッド出土。

子持壺(第13図3・図版10・3)

子持壺の壺形子器の口縁部の破片が1点出土した。自然軸の付着とロクロ成形であることが確認できる。焼成は良好であり、色調は灰白色(5Y7/2)で、胎土には砂粒が少しと黒色微粒子が見える。口径4cm前後、高さ約2.5cm。C6グリッド2層出土。

杯蓋(第13図4・5・図版10・1・2)

本調査では3点出土し、そのうち実測可能な2点を報告する。第12図4は外側に丸みを持った器形であり、縁部が屈折していない。両面の摩擦は著しく、ロクロによる成形後に外面上部をヘラで削った痕跡がわずかにみられる。焼成は不十分で質感は土師器に近く色調は淡黄色(2.5Y8/3)であり、胎土には砂粒、黒色微粒子、赤褐色微粒子が含まれる。推定径1.3cm前後。B7グリッドの1層・2層出土。

同図5は平たい形状であり、外縁部は折曲している。ロクロ技法による成形後、外面の端から2cm程を残して両面にヘラ削り調整が施されている。色調は灰色(5Y5/1)、焼成は普通であり、胎土には僅かな細礫と砂粒、白色微粒子、黒色微粒子が含まれる。推定径1.35cm、器壁の厚さ0.4cm。B9グリッドとC9グリッドの2層出土の2片が接合。

杯(第13図6・図版10・5)

1点のみ出土した。前年度報告書で蓋として報告した破片と接合し、杯本体であることが判明した。丸みをあまり帯びない底部からカーブして立ち上がった器形で、口縁部はほぼ真直ぐである。ロクロ技法で成形されたあとに内面をロクロナデ調整、外面底部をヘラ削りとナデ調整で整えている。底部にはヘラによって切り離された際の痕跡が少しだけ見える。胎土に細礫少しと砂粒、白色微粒子、黒色微粒子を含み、胎土の焼成は良好で、色調は基本的に暗灰色(N3)であるが一部に灰色(N4)が混ざる。推定口径12.9cm、高さ4.4cmで約7割が残存。A

列～C列7～10グリッド1層・2層出土。

脚部(第13図8・図版10-6)

器種不明の脚部が1点出土した。脚部は底から約2.5cm上に段差があり、長方形の透かし孔が3か所確認できる。外面は段に沈線が1条、段の上に波状文と2条の沈線が施されている。ロクロ成形後、外面にロクロナテ調整と施文を同時にしており、上部にはロクロナテ調整後に粘土を接合した痕跡がある。器体の色調は灰色(5Y6/1)で焼成は普通、胎土には細礫が少しと砂粒、黒色微粒子、白色微粒子が含まれる。推定底径15.0cm、残存高10.4cm、器壁の厚みは最も上が8.5mm、底部が3.5mm。B8グリッド2層、3層出土。

甕(第13図9・10・図版11-4・3)

甕の胴部が2点出土した。第12図9の破片は大きさの復元が難しい。外面に光沢のある自然釉がかかっている。平行線文のタタキ具を用いた拍打成形であり、内面は横方向にアテ具が擦れた痕跡があるが、はっきりとした調整痕は確認できない。器体の焼成は良好にみられ、色調は灰白色(5Y7/2)、胎土に砂粒・黒色微粒子が混ざる。器壁の厚さ0.6cm～0.8cm。C7グリッド2層出土。

第13図10は比較的大型の甕の体部である。拍打成形によって、外面は平行線文のタタキ具で調整されており、内側は円形状のアテ具を横方向へ移動させながら連続して使用している。焼成は良好であり、色調は灰色(10Y5/1)、胎土は砂粒、黒色微粒子と少しの白色微粒子が含まれる。残存部の幅17.7cm、器壁の厚さ0.9cm～0.6cm。B9グリッドとC9グリッドの2層出土。

②土師器

土師器は小破片が6点出土したが、器種が判断できるものはなかった。すべてB列とC列の7～10グリッド2層から出土している。ほとんどの破片は色調が明赤褐色(5YR5/8)から赤褐色(5YR4/8)で、胎土に砂粒と黒色微粒子が混ざり、器壁は6mm前後で表面が磨かれている点で共通する。このうちB7グリッド出土の3片はやや外反した口縁部で内面も磨かれている。またB8グリッド出土の破片1点は外面に曲線状の沈線がみられる。

③切子玉(第13図11・図版11-5)

水晶製の切子玉が1点出土した。ほぼ完全の六角形状であり、片面穿孔によるが、末端まで穿孔する直前に反対側の面が抜けているため、孔の末端がやや広がっている。高さ2.4cm、最大幅1.5cm、最小幅0.6cm、孔の大きさは最大口径4mm、最小口径1.5mm。C10グリッド2層出土。

(2) 中世以降の遺物

①陶製受皿(第13図12・図版11-6)

灯明皿の下に置く受皿が1点出土した。全体の約7割が残存しており、突帯部分を除いて内面から口縁部外側まで薄いオレンジ色の釉薬がかかっている。器体はロクロ調整で底部は回転糸切りによって切り離されている。焼成は良好であるが軟質であり、色調は淡黄色(2.5Y8/3)、胎土には赤褐色粒子と黒色微粒子が含まれる。高さ1.9cm、径9cm。B1グリッド、玄室一括、昨年度近代陶器と報告したG1グリッド攪乱層出土の1片が接合。

②金属片(第13図13～18・図版11-13～18)

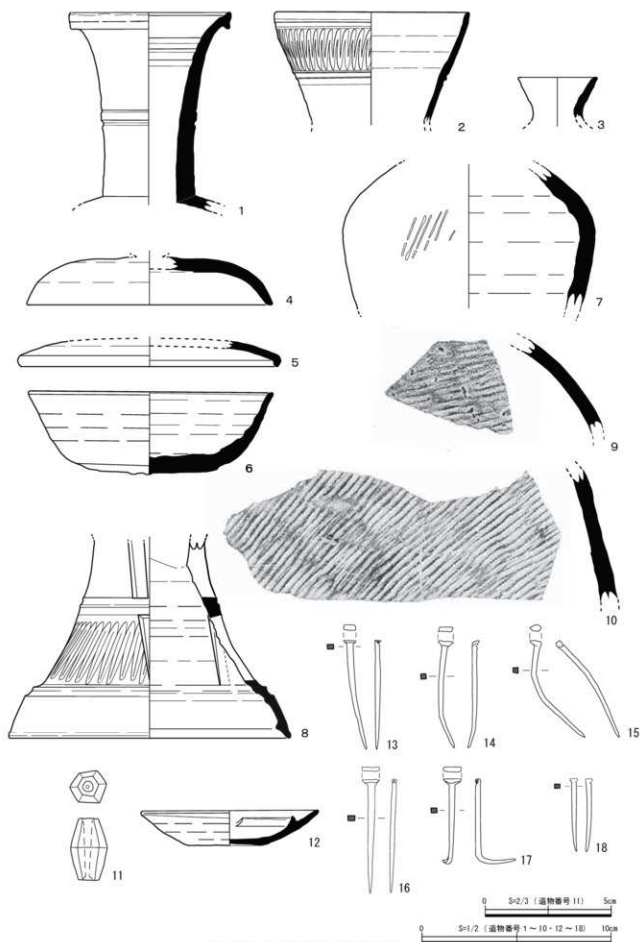
金属片は和釘12本、丸釘15本、鉄滓1個が出土した。和釘で頭頂部から先端部まで残存しているのは5本である。規格にばらつきがあるが、大きく分けて長さ6cm前後と4cm前後に分かれる。丸釘は半分以上欠損している個体が多く正確な規格などの復元は難しいが、全て長さ約4cm前後と推定される。丸釘のうち1本は波板と思われる金属片に刺さったままの状態出土した。これら釘類は主に墳頂部近くから出土している。

鉄滓は最大径4cm、重量25gの塊であり、表面には気泡の痕跡が少し残っている。B6グリッド2層出土。

③硬貨(図版11-7～12)

完形品5点と、破片1片が出土した。完形品は銅銭とアルミニウム貨幣で、銅銭は玄室一括採集の近世の寛永通寶と、B6グリッド2層出土の宋銭の天禧通寶の計2枚である。アルミニウム貨幣はB6グリッド2層出土の昭和15年製1銭、B3グリッド1層出土の昭和16年製5銭、玄室一括採集の昭和17年製1銭の3枚である。破片は鉄銭とみられるが錆がひどく、年代・銭種は不明である。

(酒匂)



第 13 图 F9号出土文物实测图

第V章 2011年度調査の成果

(1) 石室

今年度は、東壁を確認した昨年度に引き続きF9号墳の石室の発掘調査を行い、西壁と奥壁を確認した。石室床面まで到達しておらず全体はまだ不明であるが、現状では全長約7m、幅1.5mの無袖式である。天井石は残っていない。石材の積み方は、上段は小口積み、下段は平積みである。開口方向はN-12°-Wである。

松尾昌彦氏は徳高古墳群の石室を3つに分類し、A類(石室長9m前後、石室幅2m以上)を筆頭とし、B類(石室長9m前後、石室幅1~2m)、C類(石室長5m前後、石室幅1~2m)とした(岩崎・松尾・松村1983)。A類は事例が少なく、B類とC類に集中している。現状の計測値によれば、F9号墳はB類に該当しやや大きめの石室であることがうかがえる。

来年度以降は引き続き石室の掘り下げ、内部構造を明らかにすることと周溝の確認を行い当初の墳丘の規模を把握することが課題となる。

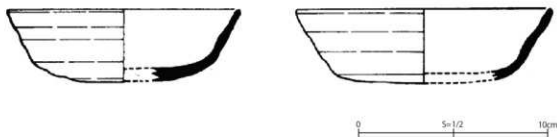
(猪瀬)

(2) 出土遺物

本調査では古墳時代から古代にかけての遺物として須恵器片35点、土師器片6点、切子玉1点が出土し、中世以降と見られる遺物は受皿1点、釘類27本、鉄滓1点、硬貨類6点が出土した。この中で、須恵器は古墳が築造されてから埋葬に使用されていた期間を検討するのに重要な資料である。

今回出土した須恵器の中では杯(第13図6)が最も残存しているが、正確な産地の特定はできていない。しかし口径・底径・器高などの法量や器壁の傾き、底部の切り離し・調整技法などの特徴を調査地から比較的近い筑摩山地西部にある安曇野市豊科田沢の筑摩東山窯跡群の出土遺物と比較した場合、上ノ山14地区1号窯(第14図)や上ノ山15地区4号窯で製作された杯に最も近い。上ノ山14地区1号窯と上ノ山15地区4号窯の操業時期は8世紀第2四半期頃に位置づけられている(豊科町東山遺跡調査会編1999)。筑摩東山窯跡群の出土遺物の方が胎土や器形を比べると若干粗雑な印象があるが、全体の調整技法や器形からみても上ノ山14地区1号窯と上ノ山15地区4号窯に近い8世紀前半前後の遺物と考えられる。

また子持壺(第13図3)は口縁部のみなので年代の判断は難しいが、全国的な編年から考えて7世紀中頃を下限とみてよいであろう(柴垣2003、山田1989)。長野県内で確認されている装飾付須恵器は茅野市高部の壺塚神塚古墳から出土した6世紀後半の子持高杯の一例のみで子持壺の存在はまだ確認されておらず、どういう経緯でF9号墳まで搬入されたかは不明である。なお昨年度出土遺物と接合した長頸瓶の頸部(第13図1)は2010年度報告書で報告したとおり、7世紀前半の中頃と見られる(國學院大学文学部考古学研究室編2011)。(酒匂)



第14図 筑摩東山窯跡群上ノ山14地区出土杯(豊科町東山遺跡調査会編1999)

第Ⅵ章 おわりにあたって

長野県安曇野市穂高古墳群F9号墳の発掘調査は、F9号墳・F10号墳の墳丘測量図の作成と周辺地域の古墳群の現状確認調査を行った2009年度の第1次調査、F9号墳での発掘調査を行った2010年度の第2次調査に続き、2011年度で第3次調査を迎えた。今年度は、第1トレンチから石室の東壁と思われる石組みを確認した昨年度の成果を踏まえて、第1トレンチの西側と北側へ拡張を行い西壁および奥壁の確認と石室床面の検出を目的とした。

発掘調査に参加した実習生の半分は調査の経験がなく、考古学調査法の授業を通して調査で使用する測量機材やカメラの使い方を学んだ。そのほかにも毎週土曜日の勉強会の中で、古墳時代についての基礎知識や穂高古墳群をはじめとした調査地付近の遺跡の概要を本学大学院生と実習生による発表を通して互いの理解を深め、機材の練習を繰り返し行い現場で滞りなく調査を進めることができるよう準備を整えた。しかし実習期間中は初めての現場作業に戸惑ったほか、天候に恵まれず雨が続いたことや石室内部で見つかったスズメバチの巣の駆除などで作業の中断が相次いだ。それによって事前に計画していたスケジュール通りに調査を進めることができず、期間の後半になるにつれて焦りや不安が募ったが最終日には夕暮れまで実習生総出でトレンチ内の実測図作成に取り組み、特別参加者の方々の大変なる協力を得てなんとか期間中にすべての作業を終えることができた。

出土遺物は77点を数え、その中には水晶製切子玉や昨年度の調査で出土した遺物と接合するものもあった。調査を終えた後は毎週木曜日の考古学調査法の授業・毎週土曜日の勉強会の時間を整理作業にあて図面の整理や出土した遺物の実測・拓本を進めた。今年度は出土遺物の点数も多く、就職活動の時期を迎える実習生も数名いたために整理作業と原稿執筆がなかなか進まず周囲の方々に大変ご迷惑をおかけしたが、実習生同士の連絡を密にするようにし、各個人で空き時間を見つけて考古学実習室を訪れ報告書の刊行に向けて一つ一つの作業を丁寧に取り組んだ。そのほかにも月に1度の検討会を行い執筆した原稿を持ち寄って様々なアドバイスを頂き、修正に修正を重ねた。ときには最終電車の間際まで大学に残り作業に追われることもあったが、無事ここに今年度の発掘調査報告書を完成させることができたことを非常に嬉しく思う。

第3次となった今回の発掘調査ではF9号墳の石室の西壁と奥壁の石組みを確認し、現状で全長約7m、幅1.5mの無袖式石室であることが判明した。天候不順などにより調査が石室床面まで及ばず全体の構造をみることができなかった点が残念であるが、来年度以降の調査における課題の一つとして取り組み、F9号墳の全容を明らかにすることで穂高古墳群の研究のさらなる発展の糸口になることができれば幸いである。

10日間という短い期間の中ではあるが充実した発掘調査であった。調査前から報告書の刊行に至るまで、細やかなご指導を頂いた先生方、先輩方をはじめご支援をくださいました皆様には厚く御礼申し上げます。

(岩井・酒匂)

引用・参考文献

- 明科町教育委員会編 1991 「ほうろく屋敷遺跡」明科町の埋蔵文化財第3集
1994 「長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書 明科町の遺跡」
1995 「上生野遺跡」明科町の埋蔵文化財第5集
1997 「塩田若宮遺跡」明科町の埋蔵文化財第10集
2000 「明科庵寺址」明科町の埋蔵文化財第7集
2001 「ほうろく屋敷遺跡Ⅳ」明科町の埋蔵文化財第11集
2005 「潮神明宮前遺跡Ⅱ」明科町の埋蔵文化財第13集
- 朝日村教育委員会編 2003 「熊久保遺跡第10次発掘調査報告書」朝日村文化財調査報告書第1集
- 安曇野市教育委員会編 2006 「東小倉遺跡Ⅴ」安曇野市の埋蔵文化財第1集
2009 「三枚橋・藤塚遺跡」安曇野市の埋蔵文化財第2集
2010 「ハツコ遺跡・三枚橋遺跡」安曇野市の埋蔵文化財第3集
2010 「安曇野市埋蔵文化財包蔵地図」
2011 「塩田若宮遺跡(第2次)」安曇野市の埋蔵文化財第4集
2012 「東小倉遺跡採集資料整理報告書」安曇野市の埋蔵文化財第5集
- 池田町教育委員会編 1977 「鬼の釜古墳」
- 石部正志 1980 「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻、学生社、370-402頁
- 伊藤直人 1983 「北アルプス南東部 蝶ヶ岳付近の水河地形と堆積段丘」『地理学評論』第56巻第1号、古今書院、35-49頁
- 岩崎卓也 1989 「第二章 古代社会の基礎」『長野県史』通史編第1巻、長野県史刊行会、204-286頁
- 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁 1983 「有明古墳群の再調査」『信濃』第35巻第11号、信濃史学会、32-60頁
- 上田市立信濃因分寺資料館編 2005 「信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡」
- 太田伯一郎 1923 「第二章第三節 遺跡(古墳)」『南安曇野郡誌』(旧版)、南安曇野郡教育会、199-231頁
- 大町市教育委員会編 1979 「借馬遺跡Ⅰ」
1980 「借馬遺跡Ⅱ」
1981 「借馬遺跡・追分遺跡・前田遺跡・南原遺跡Ⅲ」大町市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
1985 「借馬遺跡・花見遺跡Ⅳ」大町市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
1988 「來見原遺跡Ⅱ」大町市埋蔵文化財調査報告書第14集
1990 「一律」大町市埋蔵文化財調査報告書第16集
1992 「中城原遺跡」大町市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 大場賢雄・永峯光一・原 嘉藤 1963 「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報」『信濃』第15巻第12号、信濃史学会、1-20頁
- 大場賢雄・原 嘉藤 1961 「長野県塩尻市柴宮発見の銅鐸」『信濃』第13巻第4号、信濃史学会、2-20頁
- 小河深美 1991 「第3章 陸水と土壌」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会、51-87頁
- 河西清光・松尾昌彦 1984 「穂高古墳群」『長野県史』考古資料編(3)、長野県史刊行会、219-230頁
- 春日賢一 1921 「北安曇郡に於ける古墳」『信濃教育』第417号、信濃教育會事務所、18-22頁
- 桐原 健 1962 「松本市中山古墳群出土の土器様相」『信濃』第14巻第11号、信濃史学会、30-41頁
1970 「信濃における古墳出土の鉄剣-松本市栢瀬山古墳出土の鉄剣を通じて」『信濃』第22巻第4号、信濃史学会、45-56頁
1980 「松本市中山の古墳・古墳群-既掘古墳記録と中山考古資料館収蔵資料の提示」『長野県考古学会誌』36、長野県考古学会、22-44頁
1991 「第二章第三節 古墳時代」『穂高町誌』第2巻、穂高町誌刊行会、57-99頁
1996 「第二編第一章第三節 奈良・平安時代」『松本市史』第2巻、松本市、272-298頁
1996 「第二編第二章第一節 弘法山古墳の時代」『松本市史』第2巻、松本市、300-313頁
1996 「第二編第二章第二節 古墳文化の発展」『松本市史』第2巻、松本市、314-325頁
2002 「明科庵寺が提起する問題」『信濃』第54巻第12号、信濃史学会、55-61頁
2004 「信濃の東山道新駅にかかわる推論」『信濃』第56巻10号、信濃史学会、40-49頁
- 熊井深志 1996 「第2章第1節 地形」『松本市史』第1巻 自然編、松本市、26-48頁

- 弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編 1978 『弘法山古墳』
- 國學院大學文学部考古学研究室編 2010 『長野県安曇野市穂高古墳群2009年度墳丘測量調査・現状確認調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第44集
- 2011 『長野県安曇野市穂高古墳群2010年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第45集
- 小林秀夫 1997 『千曲川流域における古墳の動向－5世紀代の古墳を中心にして－』『長野県考古学会誌』第82号、長野県考古学会、80－100頁
- 近藤義郎編 1952 『佐良山古墳群の研究』津山市
- 酒井潤一・仁科良夫・木村純一 1988 『第4章 第四系 第3節内陸地域(5) 松本盆地』『日本の地質4「中部地方1」』共立出版株式会社、155－157頁
- 猿田文紀 1931 『南安曇野郡穂高町上原区古墳発掘に就て』『信濃考古学会誌』第2年第5・6輯、信濃考古学会、168－171頁
- 1933 『南安曇野郡穂高町上原区古墳発掘に就て』『史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯、長野県・長野県教育委員会、61－81頁
- 塩尻市教育委員会編 1980 『史跡平出遺跡遺構確認調査報告書－昭和54年度－』
- 1981 『史跡平出遺跡遺構確認調査報告書－昭和55年度－』
- 1982 『男屋敷』
- 1982 『史跡平出遺跡遺構確認調査報告書－昭和56年度－』
- 1983 『丘中学校遺跡－長野県塩尻市丘中学校遺跡発掘調査報告書－』
- 1983 『史跡平出遺跡－昭和57年度発掘調査報告書－』
- 1985 『堂の前・福沢・青木沢』
- 1986 『史跡平出遺跡－環境整備報告書－』
- 1986 『長野県塩尻市粗原遺跡発掘調査概報』
- 1986 『吉田川西遺跡』
- 1987 『史跡平出遺跡－昭和61年度県営かんがい排水事業中信平地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
- 1987 『砂田遺跡』
- 1987 『田川端・宗張』
- 1988 『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(向陽台遺跡)』
- 1988 『和手遺跡－塩尻市市道と手北線道路新設改良工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
- 1990 『竜神平遺跡』
- 1991 『中挟・五日市場』
- 1991 『葛澤窪跡発掘調査報告』
- 1991 『平出遺跡－平成2年度県営畑地帯総合土地改良事業桔梗ヶ原地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
- 1992 『丘中学校遺跡－塩尻市丘中学校改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－』
- 1994 『矢口・唐沢南遺跡』
- 1997 『和手遺跡－カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ－』
- 1997 『和手遺跡－カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ－』
- 1998 『下境沢遺跡』
- 1999 『北原遺跡』
- 2000 『中挟遺跡』
- 2002 『女天山ノ神・牛売沢・鶯ヶ沢遺跡』
- 2004 『史跡平出遺跡－平成14年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査報告書－』
- 2006 『史跡平出遺跡－平成16年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査概報－』
- 2009 『史跡平出遺跡－平成19年度史跡等総合整備活用事業推進事業に係る発掘調査概報－』
- 2010 『史跡平出遺跡－平成20年度史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査概報－』
- 重野昭茂 1991 『第1章 総論』『穂高町誌 自然編』穂高町誌刊行会、4－8頁
- 2007 『自然環境による安曇野古代鳥川扇状地の開発』『信濃』第59巻第3号、信濃史学会、39－59頁
- 自然観察資料集作委員会編 1983 『第二章 松本盆地の生い立ちを求めて』『松本盆地のおいたちをさぐる』松本市教育会・東筑摩塩尻教育会・南安曇教育会・北安曇教育会、60－77頁
- 信濃史料刊行会編 1956 『信濃史料』第1巻上、信濃史料刊行会
- 柴垣勇夫 2003 『第6章 装飾付須恵器』『考古学資料大観』第3巻 土器Ⅲ、小学館、355－360頁

- 白石太一郎 1973 「大型古墳と群集墳」『権原考古学研究所紀要考古学論叢』第2冊、93-120頁
- 高野豊文 1972 「長野県総説 Ⅲ章1.地形」『日本地誌』第11巻 長野県・山梨県・静岡県、日本地誌研究所編、二宮書店、14-19頁
- 豊科町教育委員会編 1992 「吉野町館跡遺跡」
- 豊科町郷土博物館編 1999 「土器づくりのムラを掘る -上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群の発掘調査-」
- 豊科町東山道跡調査会編 1999 「筑摩東山 上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告」
- 鳥居龍藏 1925 「豊科町より」『有史以前の後を尋ねて』雄山閣、126-199頁
- 中島豊晴 1976 「穂高町塚原F1号墳調査概報」『長野県考古学会誌』第25号、長野県考古学会、55-57頁
- 長野県教育委員会編 1969 「国鉄複線化等開発地城址遺文化財緊急分布調査報告書」
- 長野県文化財保護協会編 1976 「上原」
- 長野県埋蔵文化財センター編 1988 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2-塩尻市内その1-青木沢・青木沢・八窪・大原・北山・御堂垣外・栗木沢・ヨケ・樋口・高山城跡・竜神・竜神平・山の神・中原・大原・上木戸・千本原・高田・吉田向井遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2
- 1989 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3-塩尻市内その2-吉田川西遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3
- 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7-松本市内その4-南栗遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書7
- 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8-松本市内その5-北栗遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書8
- 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書9-松本市内その6-三の宮遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書9
- 1993 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11-明科町内-北村遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14
- 1997 「国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書1 穂高古墳群-近世集石遺構の調査」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23
- 2003 「国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書2-大町市内その1-山の神遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60
- 2005 「安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書-三郷村内-三角原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76
- 西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号、岡山史学会、154-207頁
- 新納 泉 1983 「裝飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号、考古学研究会、50-70頁
- 仁科良夫 1991 「第2章 地形と地質」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会、11-48頁
- 土生田純之 1996 「長野市地附山古墳群(上池ノ平古墳)について」『専修考古学』第6号、専修大学考古学会、31-43頁
- 原 嘉藤・小松 虔 1972 「長野県松本市中山第36号古墳(仁能田山古墳)調査報告」『信濃』第24巻第4号、信濃史学会、61-76頁
- 平出道跡調査会編 1955 「平出 長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究」朝日新聞社
- 平林潤郎 1988 「第三章 古代の松川村」『松川村誌』歴史編、松川村誌刊行会、59-84頁
- 藤澤宗平 1968 「第2編古代 第3章古代の村と牧 第1節古代における集落」『南安曇野郡誌』第二巻上、南安曇野郡誌改訂編纂会、183-227頁
- 藤森栄一 1939 「信濃諏訪地方古墳の地域研究史」『考古学』第10巻第1号、東京考古学会、1-55頁
- 1974 「古墳の地域的研究」永井出版企画
- 藤森孝俊 2006 「4中部山岳 9中部山岳の盆地・平野(2)松本盆地と神城・北城盆地・穂川谷」『日本の地形』5中部、東京大学出版会、206-212頁
- 降旗和夫 2007 「第1章明科町の自然環境 2.地形と地質」『明科町史』自然編、4-14頁
- 保寿裕之 1991 「6章 植物」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会、171-209頁
- 穂高町教育委員会編 1970 「穂高町の古墳」柳沢書苑
- 1972 「長野県南安曇野郡穂高町離山道跡発掘調査報告書」
- 1987 「穂高町矢原道跡群(馬場街道遺跡)」
- 2001 「他谷道跡調査報告書」
- 2001 「穂高町 一本松・神の木・宗徳寺・南原道跡 穂高沢水系による開発、上原古墳」

- 徳高町誌編纂委員会編 1991 「徳高町誌 付図」第24図、徳高町誌刊行会
- 徳高町・徳高町教育委員会編 1989 「徳高町の古墳群との人々」徳高町・徳高町教育委員会
- 本郷村教育委員会編 1966 「信濃浅間古墳」
- 松川村教育委員会編 1968 「有明神社」
- 1993 「南の原A地点－縄文中期集落跡－」
- 松本市教育委員会編 1972 「長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書 昭和45年度」
- 1979 「松本市・大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査報告書」
- 1986 「松本市岡田西裏遺跡」松本市文化財調査報告No.44
- 1986 「松本市宮渕本村遺跡」松本市文化財調査報告No.45
- 1987 「松本市赤木山遺跡群Ⅱ」松本市文化財調査報告No.47(石行道跡)
- 1987 「松本市下原・埋橋遺跡」松本市文化財調査報告No.49・50
- 1987 「松本市宮渕本村遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.52
- 1987 「推定信濃国府Ⅴ」松本市文化財調査報告No.56
- 1988 「松本市鳥立三の宮遺跡」松本市文化財調査報告No.57
- 1988 「松本市林山腰遺跡」松本市文化財調査報告No.61
- 1989 「松本市千鹿頭北遺跡」松本市文化財調査報告No.69
- 1989 「松本市鳥立三の宮遺跡Ⅲ」松本市文化財調査報告No.76
- 1989 「松本市宮渕本村遺跡Ⅲ」松本市文化財調査報告No.77
- 1990 「松本市坪ノ内遺跡」松本市文化財調査報告No.80
- 1990 「松本市向畑遺跡Ⅲ」松本市文化財調査報告No.83
- 1990 「松本市三の宮遺跡Ⅳ」松本市文化財調査報告No.84
- 1990 「松本市小原遺跡」松本市文化財調査報告No.86
- 1991 「針塚古墳の発掘」
- 1991 「松本市生妻遺跡」松本市文化財調査報告No.89
- 1992 「松本市大村塚田遺跡」松本市文化財調査報告No.96
- 1993 「松本市埴原北遺跡 中山古屋敷遺跡 推定信濃諸牧牧監庁跡Ⅱ 小丸山古墳」松本市文化財調査報告No.101
- 1993 「松本市針塚遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.102
- 1993 「松本市大村 古屋敷遺跡 前田遺跡」松本市文化財調査報告No.103
- 1993 「松本市下原遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.106
- 1993 「松本市小原遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.107
- 1994 「松本市高宮遺跡」松本市文化財調査報告No.116
- 1996 「松本市小原遺跡Ⅲ」松本市文化財調査報告No.123
- 1997 「小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡」松本市文化財調査報告No.126
- 1997 「エリ穴遺跡」松本市文化財調査報告No.127
- 1998 「長野県松本市境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ」松本市文化財調査報告No.130
- 1999 「長野県松本市出川西遺跡Ⅵ」松本市文化財調査報告No.135
- 1999 「長野県松本市高宮遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.136
- 2000 「長野県松本市大幡原遺跡」松本市文化財調査報告No.146
- 2000 「松本市平瀬遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.142
- 2000 「長野県松本市出川南遺跡Ⅶ」松本市文化財調査報告No.147
- 2001 「長野県松本市百瀬遺跡Ⅳ」松本市文化財調査報告No.151
- 2003 「松本市県町遺跡Ⅶ」松本市文化財調査報告No.165
- 2003 「長野県松本市平田本郷遺跡Ⅳ・Ⅴ」松本市文化財調査報告No.166
- 2003 「長野県松本市桜ヶ丘古墳 再整理報告書」松本市文化財調査報告No.170
- 2004 「中山古墳群・畷形原遺跡・畷形原磐石」松本市文化財調査報告No.175
- 2005 「長野県松本市大村遺跡Ⅵ」松本市文化財調査報告No.177
- 2005 「松本市立考古博物館リニューアル記念シンポジウム報告書 松本平の発掘を語る。」
- 2006 「長野県松本市岡田西裏遺跡Ⅶ」松本市文化財調査報告 No.182
- 2008 「長野県松本市下出口遺跡」松本市文化財調査報告No.192

- 2008 「長野県松本市平田本郷遺跡-第六次発掘調査報告書-」松本市文化財調査報告No.195
 2008 「長野県松本市中山古墳群14・15、カニホリ東・西遺跡」松本市文化財調査報告No.196
 2009 「長野県松本市出川南遺跡-第14次発掘調査報告書-」松本市文化財調査報告No.198
 松本盆地団体研究グループ 1977 「松本盆地の第四紀地質-松本盆地の形成過程にかかわる研究(3)-」『地質学論集』
 第14号、日本地質学会、93-102頁
- 三木 弘 1990 「魏石鬼窟古墳を利用した修験道」『穂高町郷土資料館』第12号
 1991 「有明古墳群の再検討(1)」『信濃』第43巻第12号、信濃史学会、14-30頁
 2006 「有明古墳群の再検討(2)-魏磯城窟古墳の再考を通じて-」『長野県考古学会誌』118号、長野県考古学会、179-193頁
- 三木 弘・寺島俊郎・西山克己 1987 「長野県安曇野郡穂高町所在魏石鬼窟古墳について」『信濃』第39巻第5号、信濃史学会、179-193頁
- 三郷村教育委員会編 1999 「三郷村埋蔵文化財(資料集)」三郷村の埋蔵文化財第4集
 2003 「東小倉遺跡Ⅲ」三郷村の埋蔵文化財第5集
 2005 「東小倉遺跡Ⅳ」三郷村の埋蔵文化財第6集
 2005 「三郷村埋蔵文化財Ⅱ 発掘調査・試掘調査報告書」三郷村の埋蔵文化財第7集
- 水野正好 1970 「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本5 近畿』角川書店、195-212頁
 1975 「群集墳の構造と性格」『古代史発掘6 古墳と国家の成り立ち』講談社、143-158頁
- 宮坂光次 1922 「信州南安曇野郡有明村ドルメン類似の古墳に就いて」『人類学雑誌』第37巻第9号、東京人類学会、299-304頁
- 宮地直一 1949 「穂高神社史」穂高神社
- 向坂綱二 1964 「古墳群の群別に関する概念規定」『考古学手帖』21、塚田光、7-8頁
- 百瀬 貢・駒澤大学自然地理研究会 1984 「松本盆地西縁、烏川流域の地形-伊藤(1983)に対する討論-」『日本地理学会発表要旨集25』日本地理学会、8-9頁
- 森 浩一・石部正志 1962 「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』第30号、古代史研究会、1-6頁
- 山形村教育委員会編 1981 「三夜塚遺跡」山形村遺跡発掘調査報告書第3集
 1982 「神明遺跡・三夜塚遺跡」山形村遺跡発掘調査報告書第4集
 1997 「淀の内遺跡」山形村遺跡発掘調査報告書第7集
 2001 「淀の内遺跡Ⅳ」山形村遺跡発掘調査報告書第11集
 2002 「三夜塚遺跡Ⅲ」山形村遺跡発掘調査報告書第12集
 2009 「下原遺跡・三夜塚遺跡Ⅳ」山形村遺跡発掘調査報告書第15集
- 山田邦和 1989 「裝飾付須恵器の分類と編年(上):裝飾付須恵器の基礎的研究1」『古代文化』41巻8号、古代学協会、16-29頁
- 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5、角川書店、325-350頁
 2007 「古墳群の分析視角」『関東の後期古墳群』六一書房、7-32頁

発掘調査参加者・関係者一覧

平成23年度考古学実習生

猪瀬亜沙美・岩井優莉佳・酒匂喜洋・嶋崎明音・関 明日美・西野秀知・橋本梨紗・牧野悠人・波邊 直

発掘特別参加者

上妻太樹・浅海莉絵・加藤大二郎・北澤宏明・久我谷漢太・佐藤 海・馬場羽瑠桂・日野正祥・矢野亜里彩・湯沢 丈(以上國學院大學学生)・朝倉一貴・有福小百合・石守 晃・伊藤 愛・枝野孝彦・久保田健太郎・藏野泰洋・齋藤 唯・鈴木孝規・高橋智也・中島金太郎・成田 裕・西田親史・山口 晃(以上國學院大學大学院生)・位田英騎・上田 翼・大宮宏和・佐藤周平(以上國學院大學卒業生)

調査協力機関・協力者

国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所・アルプスあづみの公園管理JV・長野県教育委員会・安曇野市教育委員会・安曇野市穂高郷土資料館・安曇野市豊科郷土博物館・ビジネスインあづみ野・長野県立歴史館・松本市立考古博物館・あづみの公園歴史愛好会・渋谷氷川神社

青木 敬・石橋 宏・伊藤慎二・稲田美里・内川隆志・内堀 団・太田圭都・加藤里美・桐原 健・笹生 衛・篠達富恵・植山林織・関 広克・高野晶文・多田博志・土屋和章・那須野雅好・服部和弘・原 智之・平林 彰・古谷 毅・松井雅彦・三木 弘・村松誠支・山岸美夫・山下泰永・山田真一

見学者

市川淳子・加藤多一・小林信一・白井久美子・砂田華寿・谷口桂子・谷口 萌・中川 香・中島大輔

写真図版



展望台からの調査地遠景

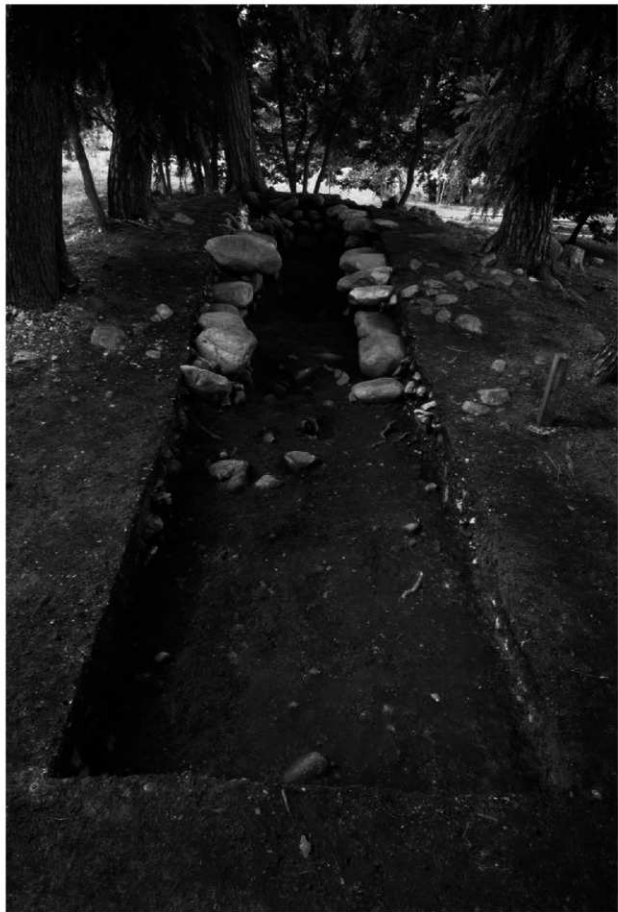


1 墳丘全景(東から)



2 墳丘全景(南西から)

図版 2



1 トレンチ全景(南から)



1 トレンチ全景(北から)

図版 4



1 奥壁(南から)



2 A1・A2グリッド東壁(西から)



1 A3・A4グリッド東壁(西から)



2 A5・A6グリッド東壁(西から)

図版6



1 A7・A8グリッド東壁(西から)



2 A9・A10グリッド東壁(西から)



1 C1・C2グリッド西壁(東から)



2 C3・C4グリッド西壁(東から)

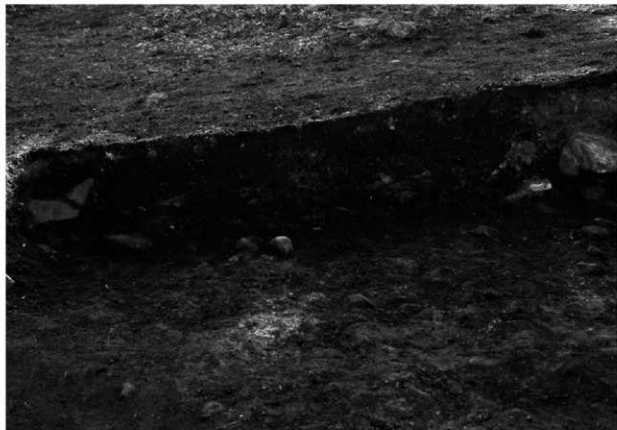
図版 8



1 C5・C6グリッド西壁(東から)



2 C7・C8グリッド西壁(東から)



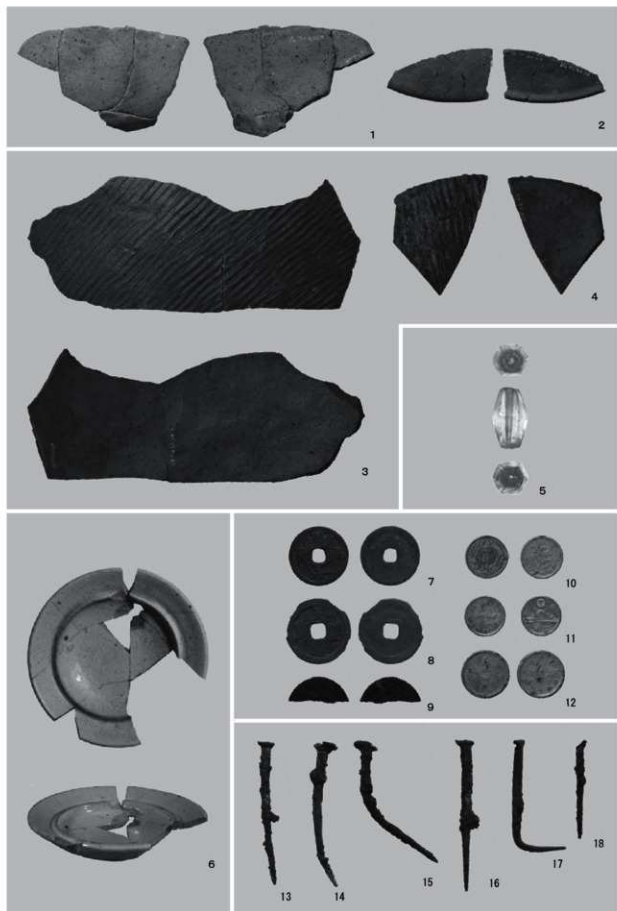
1 C9・C10グリッド西壁(東から)



2 埋め戻し後全景(南東から)



1 F9号填出土土器 (S=1/2)



1 F9号墳出土土器・切子玉・近世陶器・硬貨・釘 (土器:S=1/2 その他:S=2/3)

報告書抄録

ふりがな	ながのけんあづみのし ほたかこふんぐん 2011ねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県安曇野市 穂高古墳群 2011年度発掘調査報告書							
シリーズ名	國學院大學文学部考古学実習報告							
シリーズ番号	第46集							
編者名	(編集) 吉田恵二 中村耕作 (著者) 猪瀬亜沙美 岩井優莉佳 酒匂喜洋 嶋崎明音 関明日美 西野秀知 橋本梨紗 牧野悠人							
編集機関	國學院大學文学部考古学研究室							
所在地	〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 TEL03(5466)0248							
発行年月日	2012(平成24)年7月31日							
遺跡名	所在地	市町村番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
穂高古墳群 F9号墳	ながのけんあづみのし 長野県安曇野市 穂高柏原3653	20220	2-F9 (穂高古墳8)	36° 19' 08"	137° 51' 29"	20110820 ～ 20110829	26.25㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物			特記事項		
穂高古墳群 F9号墳	古墳	古墳後期 中世 近世・近代	円墳。須恵器片(杯、長頸瓶口 頸部、子持壺など)、土師器片、 切子玉、近世陶器、硬貨、釘が 出土。			鳥川扇状地の南側に位置するF 群の中でも最も上位に位置し、 二つ塚と通称される2基の古墳 のうちの1基。		
要約								
2009年度から始まった國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環とした学術調査の3年目の調査である。今年度は、昨年度に引き続きF9号墳の発掘調査を行い、石室の規模を確認した。石室奥壁及び東西両壁を検出したことにより、石室長約7.0m、幅約1.3～1.5mの規模で、無袖式であると判明したが床面と周溝の確認までには至っていない。トレンチ内から出土した遺物のうち、須恵器の長頸瓶は7世紀前半、杯は8世紀前半と考察する。								

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行)者の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出典を明記してください。

昨年度報告書における三木弘氏の論考の引用に下記の誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。

35ページ

- ・10行目：「…口縁部直下には段がみられない。」→「…口縁部直下には段はみられない。」
- ・11行目：「…胴部は丸みが強い。…」→「…胴部は丸味が強い。…」
- ・13行目：「口縁部下に段を持たないが、頸部に沈線が巡らされる点は…」
→「口縁部下に段をもたないが、長い頸部には沈線が巡るといふ、…」
- ・14行目：「…色彩を濃く持ったものであるとし、7世紀代前半でも中葉に近い年代…」
→「…色彩を濃くもったもの」であるとし、「7世紀代前半でも中葉に近い時期…」
- ・15行目：…ようか」(三木1991)。 → …ようか」(三木1991) と述べている。
- ・第14図土器番号の訂正 3 ↔ 4

國學院大學文学部考古学実習報告書 第46集

長野県安曇野市
穂高古墳群

2011年度 発掘調査報告書

2012年7月31日 発行

編集 吉田 恵二

中村 耕作

発行 國學院大學文学部考古学研究室

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

電話 03 (5466) 0248

印刷 株式会社 秀 飯 舎
